

なつた、自分も心ない訪問者の一人と考へたからである。同時に、靱彦氏の名聲と、その人格から来る町の人々の大きな敬意に感銘したと云ふ。

吉川 靈華

靈華氏は作物の少ない事で有名な人である。然し現在東京畫壇の大立物になつたから、やたらに筆を執らないのかと云ふとさうではない、書生時代から澤山描けない人である。筆が遅いと云ふのではなく、描く氣分になり悪い人であるらしい。

或る書畫屋が、箱書を頼みに氏を訪ねた。それは朝の事であつた。門生に通じると暫く待つてゐてくれと云ふ返事なので、書畫屋は一室に通されて待つてゐた。

然し何時まで経つても箱書が渡されない、たうとう夕方まで待つてしまつた。あまりの

事に門生に頼んで様子を見て貰ふと、

「先生は今、一生懸命に手習ひをしてをられる。」

と云ふ返事なので、書畫屋もあきれてしまつたと云ふ話がある。

氏は其の朝箱書を頼まれたので、まづ夫れに書く字を稽古しようと思つて、下書きの手習ひを初めたらしい。然し字を書いてゐる中に、それが面白くなつて夢中になり、頼まれた箱書の事などは忘れてしまつたのであらう、それで夕方まで一心に字ばかり書いてゐたのである。——それは氏の癖で、話をして興に乗ればそれに没頭して他を忘れ、本を読み出せば夫れに心を集注して總てを忘れてしまふと云ふ有様である。

震災前に、氏の作を持つてゐた人が、ある書畫屋を介して靈華氏に箱書を依頼した。氏は早速承諾した。然し此の僅か四字か五字書くだけであるが、なか／＼それが書けない。その中震災になつたが、幸福にも氏の家は被害を蒙らなかつたので、その繪に別状なかつた。然し其の後も箱書は出来ない、たうとう四年の月日が流れてしまつた。仲に立つた書

書屋の懇請で、漸く四年目になつて箱書が出来て持主に届けられたと云ふ話である。——然しそれは、持主にも敬意を表する必要のある事で、誰しもが自分の手に入つたものは、直ぐに床の間を飾りたがるものであるのに、四年の間も其の儘に氏の放擲に任せておいたと云ふのは、一寸出来ない事だと、ある人が感心してゐた。それにつけても四年越しの箱書は珍らしい。

小林古徑

誰しも少し名が出ると、とかく玄關を張りたいものである。また現在一流の大家と云はれる人々の邸は宏壯を極めてゐる。その中で古徑氏だけは何等世間的の聲名におびやかされず、依然として大森で、餘り大きくない家に住んでゐる。——質素で摯實で風采も餘り

擧らない小さい人である。

その古徑氏の詫しい玄關に或る人が立つて、案内を請うた。

形の小さい風采のあがらぬ人が出て來た、客は取次の者だと思ふから、

「先生は御在宅でございますか。」

と尋ねた。取次に出た人は、

「只今お居でなりません。」

と答へたので、客は餘儀なく用事の趣きを告げると、

「歸りましたら申傳へませう。」

さう云つて答へたので、客は傳言を頼んで歸つた。——然し其の取次ぎの男こそ、先生自身であつたのである。

かうして顔を見知らない者は、大抵先生自身に斷られて歸るのである。氏は自身で取次に出るほど、それほど大家らしくない態度の人である。

倉田白羊

スポーツマンのやうな、強健で而して立派な體軀の持主である白羊氏は、柔道などにも秀れてゐると云ふ。

この白羊氏が或る日、天現寺から青山一丁目へ向つて電車に乗つた。すると直ぐ向ふ側にゐる一人の逞しい年配の男が、妙に白羊氏の顔をジロ／＼と見る、癩にさわつた氏も、また其の男の顔をジロ／＼凝視した。眼と眼の争ひが、やがて兩人の胸に押へる事の出来な

い憤りの感情を湧き立たせて行つた。
電車が墓地下を走つて行く時分に、たうとう其の男が口を切つた。
「なんだつて人の顔ばかり見てゐるんだ。」

氏も負けてはゐない。

「貴様こそ、失禮ぢやないか。」

この口争ひがもとで、

「生意氣な、文句があるなら降りろツ。」

「よしッ、降りてやる。」

兩人は、遂に権田原の停留所で降りた。

もう其の時は日がつぶりと暮れて、夕闇が四邊に迫つて來てゐる。

二人は、争鬭の場所を、練兵場内のナンジャモンヂヤの樹の下と定めて、無言の儘歩いて、やがて、其處に來ると「ヤツ」と云ふと喧嘩を初めた。

組みつほぐれつ、上になり下になり、暫くは血の出るやうな争鬭が續いた。白羊氏も強いが其の男も強い、何時勝負がつかうとも知れなかつた。

と、いきなり其の男が叫んだ。

「待つてくれ。」

「なにツ、どうしたんだ。」

「入齒を落したんだツ。」

白羊氏は、その言葉に力もぬけた。夕闇の濃くなつた四邊は、もう顔形も辨じないほどである。その中で入齒探しにかゝつた。氏も彼のために一生懸命で探してやつた。暫くは暗中の摸索の態であつた。

「あつたツ。」

と、其の男が云つた。

「さうか。好かつた。」

白羊氏も思はず呟いた。——その時兩人は夕闇のなかで近々と顔を見合はしたが、思はずニヤリと笑つた。

「ちと、馬鹿々々しいな。」

「もう、止さうぢやないか。」

兩人は、心から又笑つた。——争鬭の幕は之れで閉ぢられた。

「仲直りをしよう。」

「ウム、一杯やらう。」

兩人は紅く灯のつく街の方へ、肩を並べて歩いて行つた。映畫一卷の終り——。

川島理一郎

國畫創作協會の主腦者、川島理一郎氏は佛語に堪能な人である。

シャルル・ビルドラツクと云ふ佛國の美術批評家(詩人)が來朝した時、理一郎氏は案内役として彼を伴つて歩いた。ある日横濱の原富太郎氏の邸へ古美術を見に行つた歸りであ

る。少し時間が遅れて發車間際に一行は横濱驛へ駆けつけた。従つて氏も少し狼狽てゐたのは事實であらう。

氏はいきなり出札口へ飛んで行つた。然し何時までも歸つても來ない。隨行した一人の友人が見ると、氏は出札口でしきりに怒鳴つてゐるのである。そして未だ切符を受取つてゐない様子である。友人は急いで近くへ行つて見ると、出札係が切符を出さないのも道理、氏は佛蘭西語でしやべつてゐるのである。

友人も呆れたが、直ぐ氏に注意すると共に、出札係に「東京驛までの切符をくれ」と日本語で云つたので、直ぐ切符は渡された。

狼狽た氏は、釣銭も受取らず改札口目がけて走り出した。すると後から、大きな聲で、『ツリセン、ツリセン。』

と妙なアクセントで叫ぶものがある、振返つて見ると、一人の外國人が、笑ひながら氏が残した出札口の釣銭を指して、日本語で「ツリセン」と叫んでゐるのであつた。

それを見た友人も思はず吹き出さざるを得なかつた。なんと云ふ矛盾であらう、日本人の氏が佛蘭西語をしやべつて出札口を面喰はせ、外國人が日本語で「ツリセン」の注意をうながしたりなどは、餘り見られない圖である。——車中に入つて、落付いてから友人が氏に「なぜ出札口で佛蘭西語を使つたか」を尋ねたら、

『いや、あの時は、只だ切符を買はうと云ふ事だけで頭が一杯だつた。それで言葉などと云ふ事は考へてゐなかつたのだ。』

さう云つて笑つたと云ふ。終日佛人と語りながら歩いてゐた習性があつたのであらうが、一寸珍らしい話ではないか。其處に氏の一面も覗はれよう。

小出 檜 重

洋服嫌ひで有名であつた楢重氏は、洋行するまで、一度も洋服を着た事がなかつた。愈よ洋行すると云ふ時も、その間際になつて、三越へ行つてレディー・メイドを買込んで間に合はせたと云ふ人である。

その折、一番氏の頭を悩ました事は、渡航中の猿股の始末であつた。「洗つて乾して使ふ」などと云ふ事は、何うしても具合の悪い事に思はれた。それでウントと猿股を買込んで、ケースに一杯つめて置いた。

當日になつて、愈よ船に乗ると云ふ際も、最も大切に抱へ込んだのは此の猿股の入つたケースであつた。氏はしつかりと自分で持つて、誰にも渡さないほど大切に持つて持込んだ。船室に入つて、ほつと安心した、まづ大切な猿股入りのケースを側に置いて、見送りに来た友人たちと談笑してゐた。

その中、何を思ひ出したか、いきなり飛上るやうに立上つて、
「失敗つた。」

と叫んだ。友人たちが驚いて、

「どうしたんだ。」

と尋ねると、

「失敗つた事をした、……繪の具箱を忘れて来てしまつた。」

氏は愁然として云つた。友人が、

「そのケースはなんだ。馬鹿に大切にしておいたが……。」

「ウーム。」

とうなりながら、氏は其の側にある猿股入りのケースを横眼に見ながら苦笑した。

横山大観

豪放、磊落、然も溢るゝ如き人情味の持主である大觀氏には、傳ふべき澤山の逸話があり、世に既に喧傳されてゐる。

友人から世間話のやうに聞かされた、小川芋錢氏の戯談のやうな望みを耳にしても、直ぐに所持の百圓の明墨を惜し氣もなくポキンと二つに折つて、芋錢氏に贈つたりする人間味の豊かな人である。然しさうした話は、餘りに傳へられ過ぎてゐるから茲には記すまい。そして最近にあつた、氏に關する一寸とした挿話を記して見よう。

ある晩、大觀氏は友人たちと一緒に、築地の某亭に遊んだ。

其の料亭の主婦が、どうかして大觀氏に一枚の揮毫を頼みたいと、宴の酣になつた時、しきりと氏や友人に頼んだ。

斷るにも斷りきれない羽目になつて、大觀氏は一枚に筆をふるつた。

主婦は望みが足りた喜びからか、盃を重ねて酔ひしれた、そのため大觀氏に描いて貰つた繪を直ぐ仕舞はうともせず、小さく疊んだ儘席の隅に置いてあつた。酔ひにまぎれて、暫

くは忘れてゐたのであらう。

すると、大觀氏が、嫌や嫌や描いた心持を察してゐる友人の一人が、そつと其の繪を取つて大觀氏の袂のなかに押込んで置いた。

宴が果て、一同は散じたが、その跡に先刻の繪の姿は見えなかつた。——驚いた主婦は、一生懸命に探して見たが、どうしても見つからない。

話は之れで終るのだが、——それだけなら茲に書く必要はない。

數日経つた後、大觀氏の邸へ、一つの箱が届いた、それは某料亭の主婦からで、改めて箱書を頼みたいと云ふのであつた。

開けて見ると、中には、當夜大觀氏が描いた繪と同じ繪があつた。然もなか／＼好く描けてゐる。驚いたのは大觀氏だ、當夜の繪は何人かの親切で袂の中へ入れられて自分が持つて歸つてゐるではないか。——それと同じ繪が、再び主婦の許から届けられ、箱書を求められてゐる、苦笑が浮ばない譯には行かない。やがて先生は筆をとると、その箱の上に、

「偽大觀之筆」

と書いて渡した。

偽大觀之筆の繪が、何人によつて描かれたか、未だに犯人は不明である。——かくて事件は迷宮に入つた、暗中摸索の態とある。

現畫壇名家の貧窮時代逸話

中村不折

ある時は夜具も無い悲しさに、新聞紙にくるまつて寝た事もあつたと云ふ。花の都の巴里にゐた頃などは、そのドン底生活は激しかった。住んでゐた部屋は、ガランドウで何一つ道具も無く、埃と塵にまみれ、友人たちも餘り穢いので入る事が出来なかつたと云ふ。その徹底し過ぎた生活ぶりには、我が在佛邦人を擧げさせた程であつたと云はれる。

現代大家のうちで、不折氏ほど貧しい境遇を経て來た人は、たんと有るまいと云はれて

ある。それだけ氏の今日の成功には光輝があらう。

十五六歳の頃は、信州上諏訪の或る呉服店で丁稚奉公をしてゐた。そして毎日子守ばかりさせられてゐたものだ。氏は脊中に子供を負ひながら、隣りの本屋の店へ行つて色々な書物を読んだり、好きな繪を描いたりして、僅に満されぬ心を慰めてゐた。

呉服の反物には、好く美しい商標がついてゐた、その中にある西洋風の繪などがあると飛びつくやうにして、こつそり人に隠れて摸寫するのを樂しみとしてゐた。或る日、一心に摸寫してゐる處を、主人に見つけられて酷い小言を聞いた事もある。

その後は、菓子屋の職人になつた事もあつたのである。その中でも、専心勉學にいそしんで、僅な閑を偷んでは、近くの漢學の塾へ通つてゐた。

十七の時に、高遠小學校の助教員に採用され、其處で教鞭を執りながら、東京へ遊學する資金を、薄給の中から貯蓄した。そして漸く三十圓の貯へを得たので、それを懐中にして東京へ志し、十一會の小山正太郎氏に師事して、専心洋畫の研究に没頭する事が出来る

るやうになつた。そして會の雜務を手傳つて、月謝だけは免除して貰つてゐたが、如何に一圓で二斗の米が買へる時代でも、何時まで貯への三十圓で食ひつないで行ける筈はない、それで同郷の關係から、當時高橋是清さんの馬丁をしてゐた人の二階を、只だ貸して貰ひ、其處に住んでゐたりした。

その後、幾らか稼ぎも出来るやうになり、氏のお父さんが上京されたので、畫料で得た僅かな金を資本にして、芝烏森で汗粉屋を初めたりしたが、それは見事に失敗して、住む家も無い有様に立至つた。

漸く下谷池の端の、ある壊れかゝつた安下宿屋を見つけ、四疊半の部屋だけを借り、自炊生活をしてゐた。——その下宿は、つい此の間まで大觀氏の宏莊な邸のあつた處であつたと云ふ——そして、可なり永い間南京米の飯と、豌豆の鹽うでばかりを茶にして、餓を凌いでゐたのである。

當時は仕事を探すが非常に困難であつた。時折は教科書の挿畫を頼まれる事もあるが、

永續きはしなかつた。それで、京橋の三間印刷所の石版畫の色つけの仕事をしてゐたが、これは素人にも出来る事で、その方が却つて成績が好く、氏が多少工夫して塗ると氣受が悪かつた。

『どうもお前さんののは穢くていけない。』

と云ふ叱言を受け、他の素人には一枚一錢の手數料を拂つてゐるのに、氏には一枚八厘しかくれなかつたと云ふ事である。

かうした事も、今の氏にとつては、懐しい思ひ出の一つであらうか。

竹内栖鳳

維新から明治にかけて、京都のお池通り油小路に「龜政」と云ふ名の賣れた料亭があつ

た、それが栖鳳氏の生家である。

氏は長男で、當然その後を嗣がなければならなかつたのであるが、それを無理に姉の琴女に頼んで、自身は好む畫道に精進したのであつた。従つて妻を娶り子をもうけるやうになつて、家を出て分家してからは、いやでも自活獨立して行かなければならなかつた。栖鳳氏の苦境時代は、その頃の事である。

そんな間でも、氏の藝術に對する研究と精進慾は燃え盛つてゐた、氏は外國行のピロイド繪を描いて僅な生活費を得ながら、經費を惜しまず、洛中洛外の古社寺を廻つて實物を摸寫したり、近畿一帯を旅して心ゆくばかり、其の摸寫と研究に没頭してゐた。

従つて、生活費は常に滿される時がなく、その中大切な糧の基である、ピロイド繪の仕事がなくなつてしまつたので、愈よ生活は窮迫して行つた。

『どうしたら食つて行けるだらう。そして研究の費用が生み出されるだらう。』
流石物にかゝすらは無い氏も、腕を組んで思案投首をせなければならなくなつた。そこ

で氏は知る邊を頼つて、始めて畫會を興す事になつた、そして百方奔走の結果、漸く二枚折屏風百双の畫會が成立して、一息つく事になつた。

でも、當時無名の作家である氏の畫會は、會費も廉かつたから、發會の當日集つた入會金は、屏風と繪の具代を差引くと、一文も残らないと云ふみじめさであつた。然し兎に角屏風と繪の具を買ふ事が出来たので、氏は一心に其の製作に没頭し、繪が描き上げられると、それを持つて行つて會費の残額を貰ひ受け、僅に生活をさへ、幾分でも研究慾を満たす事が出来ると云ふ有様であつた。

然し此の百双畫會は、幾多の故障で、當時完成する事が出来なかつたので、その後始末は近年まで及んだと云ふ事である。

然し謹直な氏は、昔日の後援者に對する約を重んじて、後年名を成した後に至つて、多忙な中で尙ほ其の責めを果した事は、栖鳳氏の一佳話として傳へられてゐる。

横山大觀

父の意志に反して、畫道に志した大觀氏は、美術學校に勉學する學費を、自ら求めなければならなかつた。

何か、収入になる仕事を見つけないければならぬ。其處で氏は、日本橋の金港堂や文學社などにゐる知人に頼んで、漸く西洋原書の中の挿畫を摸寫する内職を引受けさせて貰つた。これは原書の翻譯を出版するため、その挿畫として使はれるもので、多くは堅苦しい理學書であつた。

この挿畫の摸寫は一枚三十錢で、月に十枚か十四五枚仕事があつた。それで月三四圓の収入が得られる事になつた。當時は此の三四圓の中から、學校の月謝を拂つた上、なほ筆

や紙を求める事が出来た。なにしろ、橋本雅邦氏の尺八が三十圓になつたと云つて、その飛切り値段に一驚した時代のことであつたから、この三四圓の収入は、一學生である氏にとつて決して少ないものではなかつたのである。

美術學校生活五年の間、氏は此の内職をつゞけた。尤も衣食の方は父の手で給されてゐた。でも、三圓の學費と小遣ひでは、他の學生のやうな満ち足りた事の出来なかつたのは勿論であらう。

『私は學生時代、酒を飲んだ事もなければ、遊里に歩を入れたこともなかつた。』
氏は今でもさう云つてゐる。

その頃、上野の山下に——今の鳥鍋の先あたり——紫蘇飯と云ふのがあつて、紫蘇飯、鱈汁、煮奴一人前十錢と云ふ具合で、なんでも十錢で食べさせる家があつた、そこへ十錢の金を握つて、友達などと十錢の紫蘇飯を、時々食べに行くのが、氏にとつて唯一の贅澤であつたのである。

島田墨仙

南畫院の大立物である墨仙氏は、雅邦氏門下の逸材で、丁度大觀氏などと、同地位にあるべき人である。

氏が雅邦氏の門にあつた頃は、ほんとうの貧書生であつた。一錢の金も懐に無い時が多かつたものである。ある年、京都で勸業博覽會が開かれる事になつて、墨仙氏もそれに出品する事になつた。

それで、四段目の由良之助を描いて見ようと考へた。丁度その折、團十郎が歌舞伎座で忠臣藏を演じてゐたので、畫面の参考として其の芝居を一度見たいと思つた。然し勿論、それを見に行く金のあらう筈はない。それで自分の希望を雅邦先生に話すと、

「それは好い、参考のため一代の名優がやる舞臺面を見て置くが好い。」
さう云つて、金二圓を觀劇料として與へられた。氏は喜んで其の二圓の金を懐にする
と、大盡になつたやうな氣分で、大手を振つて木挽町さして出かけたのである。

「オイ、暫くだつたなア。」

と云ふ聲を不意にかけられて、驚いて其の聲の主を見ると、永い事逢はなかつた、極く
親しい友人である。

「オ、珍らしいな。」

と云つて顔を見合せたが、舊友に逢つて其の儘立話だけでも別れ悪かつた。と云つて相
手の友人も、同様の素寒貧らしい、何處かで飯でも食つて話をしたいと思ふが、と云つて
自分の懐にあるのは先生が参考資料の爲め——として貰つた、觀劇料二圓だけである。
墨仙氏は、突嗟の間に色々な事を頭の中で考へ迷へつた。——その中氏の考へは大切な觀
劇よりも、舊友と一緒に、盆をあげて語つて見たいと云ふ慾望が強くなつて行つた。

「何處かで一杯やらうぢやないか。」

やがて氏の口から、自然と斯うした言葉が出てしまつた。そして二人は、近くの神田今
文の暖簾をくぐつて入つた。——その歸りには、二圓の觀劇料がなくなつてゐた事は勿論
である。

——でも、氏は、こんな理窟を考へて、團十郎の芝居を見ない事を、そんなに惜しいと
も思はなかつた。「名優團十郎の舞臺姿を見て由良之助を描けば、きつと繪に現はれるもの
は團十郎の由良之助になる。それより、自分は自分の頭に描いた由良之助を描いた方が、
一層價値があるに違ひない。」と。

ホロ酔ひ氣嫌で歸つてから、雅邦先生の前に出ると、氏は正直に自分の考へと、舊友と
の會食に依る結末を語つた。先生は怒りもせず、

「それも好いだらう。」

さう云つて、笑つてゐた。——然し、氏は其の先生の笑ひを見て、内心少なからず恐縮

したものであつた。

青山熊治

大正十五年の秋、「高原」を出品して美術院賞を得、一躍非凡の才能を認められて、新進の流行兒となつた洋畫の青山熊治氏には、涙のにじむやうな苦學時代がある。氏は十四年に佛蘭西から歸朝したのであるが、在佛當時は餘りに貧しい生活に苦しめられて、在留邦人に迷惑をかけたので、一部の人からは非常に嫌悪された程であつたと云はれる。

食ふ爲めの金を得るために、氏は佛蘭西で木樵までしてゐたのであつた。そして少しでも金を得ると、先づ第一に繪を描く材料を買つた。そして餘つた金で、チヨコレートを買い、それをポケットに入れて置いて、繪を描くのであつた。腹が減ると、公園へ出かけて行き、ロハの水道を飲み、ポケットのチヨコレートをしやぶるのである、かうして三日間位餓を凌ぎながら、畫筆に親しんだ。——そして又、木樵へ。

日本にゐた時も、可なり悲惨な生活をしてゐた、洋行する時も其の費用がないので、まづ大連まで行き、其處で苦力のやうな仕事をして金を儲け、少し旅費が溜ると、その金で先へ旅行を續ける、かうして漸く旅程を進めてペトログラードまで行きついたのである。

——氏は確に天才的人である。

其處で本野露國大使に認められ、畫室や學資まで支給を受け、専心研究に没頭する事が出来た。それから佛蘭西へ行つた。

そして、木樵の勞働と、水道とチヨコレート……で、研究を續けたのである。

然し、今は恵まれた生活のなかに、華かな前途か洋々と開かれてゐる。

石井 鶴三

石井柏亭として書きたいのであるが、同氏の性格と現在の地位に敬意を表して、舎弟鶴三氏の名に於いて記す事にした。鶴三氏は院展彫刻の同人で、且つ小説「大菩薩峠」の挿畫に筆を執つて、天下の耳目をそばだたせ、我が挿畫界に大きな革命を起させた人である事は、茲に今更云ふまでもない事であらう。

柏亭氏も、昔は印刷局の紙幣の銅版彫刻までやつた事があつたと云ふ。鶴三氏が美術學校に入學した頃は、その令兄柏亭氏は、無理な勞働のため激しい眼病にかゝつて、何の收入を得るすべもない状態であつた。従つて鶴三氏が一家が生活の道をたて、行かなければならない境遇に置かれてゐた。

それで氏は、北澤樂天がやつてゐた東京バツクに働かせて貰ひ、十數圓の收入を得て柏亭氏兄弟三人の生活費を稼いでゐた。従つて氏の一日の飯代として残されるものは、僅に三錢であつた。——それは明治四十年の頃で、川端龍子氏も當時一緒に働いてゐたさうである。——今日に比べて、如何に物價の安い當時でも、三錢では一回の辨當をさへ食べる事は出来なかつた。

氏は、その三錢で、一枚一錢の三角形の豆餅を三枚買ふのである、そして朝は家から食べて来るから、お晝に其の一枚を食べ、後の二枚を晩飯代りに残して置いて、それで晝と夜の食事に代へてゐたのであつた。

一枚一錢の豆餅三枚で、晝と夜の腹は充分に満たせよう筈はない、歸る頃には、腹が空いて来て、ひだるい程であつた。

その頃は本郷三丁目まで電車が通じてゐたが、それに乗れる金は勿論なかつた。二食分の豆餅を三錢で買つてしまへば、懐には一文も残らなかつた譯である。——氏はひだるい

腹をかゝへて、麴町の有樂町から本郷根津の自宅までテク〜と毎日歩いて歸つて行つたのである。

腹は減つてゐる、身體は疲れる……氏は動けなくなると、よくあの高等學校側にあつた砂利置場の砂利の上に腰をおろして、疲れを休めては又歩き出したものであつた。

川島理一郎

我が國展の首腦者であり、佛蘭西サロン・ドウトンヌの會員である理一郎氏は、少年時代に父と共に亞米利加に渡つて、其處で中學校を終り、美術學校を出たのである。——然し氏が美術學校に在學中當時から、父の仕事も思はしくなかつたと見えて、學費が出ないため、苦學を續けねばならなかつた。

その悲惨な境遇に同情した、同美術學校の先生が、彼方此方へ紹介して氏の描いた繪を賣つてくれたので、辛じて時折の収入を得る事が出来た。

氏は、少しでも金を得ると、まづ最初に日本の雜貨店に行つて、米を買つた、そして同時に福神漬の罐詰を買つて來るのである。それを幾日間かの食物として、氏はその有る間は、安心して勉強する事が出来た。

米と福神漬とを幾日分を買つて、なほ金が残ると、氏は室中の棚や、本箱や、引出し、書物の間などに、残つた銀貨や銅貨をばらまいて置いたものである。

愈よ、米と福神漬がなくなつて、なほ次の収入が得られない時には、氏は家さがしを初めるのである。そして彼方此方から少しづつ出て來る金で、辛じて食物を買つて餓をしのいだ。その家探しをして、思はぬ處から金が出て來るのが、云ひ知れず嬉しいものであつたと云ふ。

かうして、次に先生の紹介に依つて収入を得るまでの、生命のつなぎとしたのである。

然し、如何に家探しを隅から隅までしても、どうしても金が出て来なくなる時もあった。それほど収入が杜絶える事がある。その場合は、氏は餘儀なく、泥をのぐなどを描く時に使ふ、コンスターチを少し固く煮て、それを食べてゐた事もあつたと云ふ。

とにかく、激しい忍苦と、若しい生活を氏は海の彼方で續けて来たのである。然し今では名譽ある佛國サロンの會員として、内地より寧ろ佛國人の間に、より以上其の名聲を稱へられてゐる。

山 本 鼎

農民美術、自由畫の研究者であり、大家として、鼎氏の名は我が美術界に重きをなしてゐる。

その鼎氏も十四五歳の頃は、芝大門の西洋木版屋（木口彫）清和堂の小僧さんであつた。よく京橋の時事新報社などへ、出来上つた版を持たされて、使ひにやられたものであつた。その頃は未だ鐵道馬車の通つてゐる時代で、馬車賃として何時も三錢づゝ主人から貰つた。

然し、氏は其の三錢を貰ふと、必ず焼芋を買つてしまつた。然し遅く歸ると叱られるので、焼芋を嚙りながら、鐵道馬車と一緒に駈けて時事新報社へ行つたものであつた。

その時分から、なか／＼のきかん坊で、喧嘩早かつたらしい。——ある日、家の近所で、何處かの男と喧嘩を初めた、愈よ熱して来て、いざ取組むと云ふ段になると、氏は突然、その相手に、

『一寸待つてくれ。』

と叫んで、いきなり駈け出して家へ飛び込んだが、懷から財布を取り出すと、家の中へ放り込み「これを預つてくれ」と云つて、又、取つて返して取組んで喧嘩をしたと云ふの

である。後で家の人が「なぜ喧嘩の最中に財布を投げ込みに歸つたのか」と尋ねると、氏は

「俺がもし、殺された時、彼奴の財布にはあれつほつちの金しか入つてゐなかつたかと云はれては、死後の耻辱だからだ。」

と云つたと云ふ。

氏も、暫く、樂天氏の東京パックに入つてゐた事があつた。その折の事、涙ぐましい美しい逸話が残されてゐる。

その當時氏は、二十圓貰つてゐた。——其處に石井鶴三氏もゐたのである。——氏は鶴三氏の氣の毒な生活状態にいたく胸を折られた。それで樂天氏に對して、秘に、

「私は十圓あれば好い、後の十圓は何うか石井君にやつて頂きたい。然し此の事は貴方だけの胸に疊んで置いて、どうか石井君は勿論、誰にも云はないで下さい。」

さう云つて頼んだ、樂天氏も其の意を容れて、つい先頃まで誰にも語らなかつた。それ

が極く近頃になつて樂天氏が鶴三氏に語つた事より、世間に傳へられるに至つた。

廓を彩る江戸期遊女の逸話

岩龜樓——龜遊

幕末の廓に美しい名を残した、横濱岩龜樓の遊女龜遊は、江戸皆川町の太田正庵と云ふ醫者の娘であつた。幼い名をちゑと云つた。父は藪井竹庵の仲間であつたのか、その家は貧しかつた。それに彼女が十一歳の折、父も母も病に罹つて、益々苦境に陥つたので、餘儀なく吉原江戸町二丁目の甲子屋と云ふ家に身を賣らねばならぬ事になつた。さうしたちゑの犠牲も甲斐なく、その翌年父も母も相次いで此の世を去つた。

十五歳になつた春、源子名を子の日と名乗つて初店に出たが、非常に評判がよく、全盛樓中に並ぶものがない程であつたと云ふ。

その後、横濱の岩龜樓に住み替へて、龜遊と名乗つて、全盛を續けてゐた。その中、亞米利加人のイルースと云ふ人に見染められて、日夜その席に招かれたけれども、異國の人に肌をゆるす事をきらつて、どうしても其の意に従はなかつた。振られ、ば振られるほど何とやらで、イルースは此の異國に見出した美しい花を、如何にしても手折らないではゐられない戀情に、一層その心を悶へさせて、彼は遂に大金を投じて、龜遊の身を根引させ、その美しい肉體を自由にしようとした。——それを知つた龜遊は

露をだにいと大和の女郎花

ふるあめりかに袖をぬらさじ

と云ふ歌を遺し、自ら刃に伏して死んだ。——新聞に汚名をうたはれる、何處やらの不良モダンガールとは違つてゐる。——次に辭世の歌と共に記し残したと云ふ、涙のにじむ

彼女の遺書を掲げて置く。

世に苦界に浮き沈みするもの、幾千萬人と限りも候はず、我身も勤めする習ひとて、父母の許し給はぬ仇人に肌ゆるすさへ口惜しけれど、たゞ御主人の御恩を顧みて、二つには身の薄命と悟め侍りしも、其の元は儂き黄金と云ふ物の故ならめ、此の金、今は遊女の身を切る双となり候まゝ、其の双の苦界を離れ、彌陀の利剣に歸し参らせたく、主人も辭して亡き兩親に仕へ参らせ候へば、黄金の光をも何かせむ、恐しと思ふ慾の夢醒よかしと、誠の道を急ぎ候まゝ、無念の齒齧を表せる我が還骸を、今宵の客に御見せくだされ、かゝる卑しき浮れ女さへ、日の本はかくほどと、知らしめ給はるべく候。

因に、岩龜樓は、當時異人遊興揚屋として、外人向の娼妓がゐる家であると云はれる、そして當時の横濱遊廓は、今の公園地界隈にあつたもので、開港の翌年萬延元年に港崎町に開かれたものである。大門を入ると仲の町で、兩側に茶屋六軒に會所があり、岩龜樓、岩里、新岩龜の諸樓が並んでゐたものであると云ふ。

扇屋——夕霧

淨瑠璃と芝居でお馴染の「夕霧伊左衛門」の、其の夕霧である。彼女は本名をお照と云つた。初め京都島原扇屋の遊女であつたが、寛文十二年に扇屋四郎兵衛が大阪の新町に移つた時、伴られて来て、浪華の廓に其の艶名を謳はれた。

客からしらせがある毎に、引舟と云ふのを先へやつて、自分は其の後で客に逢ふのを常としたと云ふ。

藤屋伊左衛門と馴れそめて、起請誓紙を取り交して、深く心をゆるしてゐたのであつたが、思ふ男の伊左衛門は、父の怒りにふれて勘當の身となつた。それからの男は、紙衣姿のみじめな姿で、ひそかに夕霧を訪ねねばならなくなつた。——その姿を見た夕霧は、

「その、まあ紙衣姿は……」

と云つて泣いた。

「なにも、もう聞いてくれるな。」

さう云つて、忍び音に泣くばかりであつた。

その思ひ合つた二人の心に、深く同情した或る友人が、伊左衛門の父に話をして、夕霧を落籍して、二人を夫婦にしてやつてくれぬかと頼んだ。父も、悴の心を不憫に思つて、その落籍の事を承知したが、

「どうも、夕霧と云ふ女は、あの姿になつてゐる悴に對して、ほんとうの涙がないやうに思はれる。」

と云つた。その話を噂に聞いた夕霧は、

「この妾の心を、なほお疑ひになるやうでは、一緒にして頂いても一生馴れ親しんで行く事はむづかしいでせう。」

と云つて、落籍の事を斷つた。そして寂しい心を抱きながら、間もなく、二十七歳で世を去つた。——花岳芳壽信女となつて、寺町の淨園寺に葬られてゐる。

西村——香久山

寛永の頃、江戸吉原西村の遊女として、全盛並びなかつた美人であつたと云ふ。

或る日、頬冠りに天秤棒をかついだ、三十四五の薪賣が来て、

「私は田舎者だが、江戸へ来た土屋に、今全盛を謳はれてゐる香久山さんと云ふ太夫を一目なりと見て行きたい、どうか一寸でも逢はして下さい。」

と店の者に頼んだ。如何にも眞面目な面持で頼まれたので、店の者も無氣に歸すのも氣の毒になり、とにかく太夫に尋ねて上げようと云つて、香久山に通じた。すると香久山は

直ぐ店の表まで出て来て、

「妾のやうな者を、それほどに仰しやつて下さるとは、この身の冥利でございます。」
と云つて、取寄せた盃を其の田舎者の薪賣にさしてやつた。男は持つてゐた薪を打ち割つて爐に燻べ、それで酒を暖めて、一口飲んで厚く香久山に禮を云つて歸つた。

暫くすると、廓の中に香りも床しい伽羅の匂ひが満ち渡つて漂うた。人々は不思議の事に思ひ、何方でかゝる香をば焚くのであらうと、追ひ々に探ね探ねて、やがて西村の店へ集つて来た。見ると例の爐から盛に床しい香りがたつてゐる。

それと、立騒ぐ人々を軽く止めた香久山は、

「これこそ柴船と云ふ名木でございます。」

と云つたので、さてはと氣づいた鴉女が「勿體ない」と云つて、例の薪を爐から取り出さうとすると、香久山は押し止め、

「今更取出しては、樓の者のさもしさを笑はれませう。」

と云つた。

その翌日、香久山は芝の去る大盡に落籍された、その大盡こそ前日の、薪賣であつた。

三浦屋——高尾

夕べは波のうへの御かへらせ、いかゞ候や。やかたの御しゆび、つゝがなくおはし候や。御げんのまゝ、忘れねばこそ思ひ出さず候

君は今駒形あたりほとゝぎす

高尾

千里さま

これは有名な文章で、即ち初代高尾のものしたものであると云ふ。俗に云ふ仙臺高尾又

は鹽原高尾と云つて、當時廓に艶名を謳はれた女である。

承應三年吉原三浦屋に現れ、萬治三年に高尾と改名して全盛を極めた。それで萬治高尾とも云はれる。——三浦屋の高尾には九代まであつた。二代は石井高尾、三代ははね字高尾、四代は西條高尾、五代は島田高尾、六代は紺屋高尾、七代は子持高尾、八代は六本高尾、この人足の指が六本あつたと云ふ噂がある。次に九代は榊原高尾と俗稱されてゐるが、初代が一番偉かつたらしい。

仙臺の藩主伊達綱村侯に落籍され、品川の下屋敷に圍はれお椀の方と云はれたが、このため綱村は幕府から蟄居を申附られるに至つた。これが萬治三年七月の事で、當の高尾は享保元年十一月二十五日に七十七歳で死んだ。——仙臺侯に落籍され、仙臺侯を蟄居させた處から、仙臺高尾の名がある譯である。生れが野州鹽原である處から、鹽原高尾とも云はれる。

生前に、熊谷某の二男を養子とし、千石を賜つた、これが相原新太夫と云ふ人である。

高尾は歌文に秀でてゐた。新年の書初めに詠んだ、

書初めやはづかしながら嘘はじめ

の句も、有名なものである。

萬字屋——萬壽

萬治年間吉原萬字屋の格子女郎であつたが、意氣と俠氣でその名を賣つた。情人三吉に熱情をそゝいで、勤めを疎かにしたため一時は下女にまで成り下つた事もあつた。

後に全盛を謳はれるに至つた時、去る大書が、
『お前の付けてゐる蔦の紋は、色男三吉の紋だらう。その紋のついてゐる品物はみんな此の俺に呉れる。』

と云つたので、自分の衣類を長持三棹ばかり大盡の許へ送り届けた。すると大盡から、自分の紋所の牡丹の紋をつけた衣類六棹を送つて來たが、萬壽は又その夜の中に、再び葛の紋を附けた衣裳を作つて、見事大盡を振り飛ばして其の意氣を見せた。それが評判になつて、「奴萬壽」と呼ばれ、益々其の艶を謳はれるに至つた。

松葉屋——瀬川

徳川期を通じて、江戸吉原屈指の名高い太夫である。生れは下總國小見川村の農家の娘である。幼い時から松葉屋に身を沈めたが、容貌と云ひ、氣質と云ひ、一世にすぐれてゐた。遊藝は勿論、文事にも造詣が深く、繪は池大雅に學んで非凡な技能であつた。殊に人相を見る事が上手で、殆ど百發百中の概があつた。

ある時、同樓の雛鶴と云ふ遊女を相て、

『貴方はきつと立派な奥さんになれるでせう。』

と云つたが、果して豪商に落籍されて其の内儀となつた。また或る時、やはり朋輩の胡蝶と云ふのが、深川の材木商に落籍されようとした時、瀬川が相て、

『今は善いが、後には悪く。』

と云つたのを、誰も本當にするものもなかつたが、果して其の材木商は間もなく罪を犯して牢舎の人となつた。

當時、常盤津の文字太夫が、その道の名人として世間に知られてゐた。その文字太夫が瀬川に心を寄せて、どうかして一夜の享樂を共にしたいと念じた。それで彼は、ある日間の正三と云ふのに三十兩を渡し、瀬川への橋渡しを頼んだ。然し其の頃廓の慣習で、藝人は一切公然と登樓して遊興する事を許されなかつた。其處で正三は色々苦心をした結果、直接全盛の瀬川に頼んで、特に文字太夫を客とする事を許して貰つた。勿論藝人と云ふ事

は内密にして貰つての上である。

文字太夫は得意であり、有頂天であつた、やがて其の席に瀬川が来ると、

「貴方は、大變常盤津がお上手ださうですが、是非一つお聞かせ下さいまし。」

と、美しい顔に微笑を浮べて云つた。文字太夫は、一層得意然として、美聲をしぼつて

一曲をうたつた。

瀬川は艶然として、

「御苦勞さまでした。」

さう云ひながら、禿に命じて、兼て用意の金一封を持つて来させ、文字太夫の前にすゝ

めると、靜に立つて其の席を去つてしまつた。文字太夫は只だ呆然として後を見送るばかりであつた。——一封には金十兩の祝儀が入つてゐたのである。瀬川の風懷を忍ぶ逸話の

一つであらう。その後瀬川は、豪商江戸屋宗助に愛されて落籍の上妾となつた。その際樓主をはじめ、

朋輩たちもしきりと止めたのであるが、

「自分で自身を相して見ると、これが定まるべき運命と思はれます。」

と云つて、妾の地位に甘んじて宗助の意に従つた。そして二十八の盛りで逝つた。

巴屋——勝山

寛永の頃、丹前風又は丹前六法など、云ふ名稱を市井仁侠の間に流行させた。その起り

は神田雉子町の丹後侯の邸前にあつた、所謂丹前風呂からであつた。

その風呂屋には、多くの美しい湯女がゐて遊客を招いた。後年吉原の廊に其の名を馳せ

た勝山は、その初め此の丹前風呂、市郎兵衛方の湯女であつた。

その後湯女が禁止されたので、彼女も吉原の巴屋三郎左衛門の抱へ遊女となつた。彼女

は姿も美しかつたが、男も及ばぬ秀れた氣象の持主であつた。——彼女が未だ丹前風呂に居つた頃は、外出する時必ず男風の黒仕立で、編笠を冠り木刀を腰にしてゐたと云ふ。當時男達として、江戸に其の名を喧傳されてゐた唐犬の權兵衛が、日頃から此の勝山の男を男とも思はぬやうな、その美しい艶姿を、何となく心憎いまでに思つてゐた。どうかして一度は、あの物に動じない、勝山の度膽を抜いて、驚かしてやらうと云ふ悪戯心を抱いてゐた。

ある日の事である、自慢の勝山鬘に、人眼を眩ますやうな華かな衣装を着飾つて、仲の町に八文字を踏んで道中して來る處へ、唐犬權兵衛がやつて來た。彼はそれを見ると、ニヤリと笑ひながら、ツカ／＼と道中の勝山の前に進むと、いきなりドシンと身體を當てながら、腰に差してゐる脇差を抜く手も見せず、すれ違ひ様に、勝山の髪を警からスラリと切つて落した。——道中を見物してゐた人々が、この突嗟の狼藉を眺めて、思はずワツと聲を擧げてざわめいた。

然し、當の勝山は、顔色一つ變へなかつた。彼女は顔に微笑さへ浮べて、どよめく人々を知らぬ様で、靜に尙ほ八文字を踏んで、歩いて行つた。その足元に些の亂れもなかつたのである。

これを見た唐犬は、あまりに落附はらつた勝山の態度に、思はず身を震はせたと云ふ。「耻しい話だが、あの時ばかりは、切つた俺が恐しかつた。」

そう云つて、好く述懐したさうである。

寛永三年十月十一日、仲の町を道中の時、勝山は、黒縹子の小袖に金糸でもつて、

妹背山ながる、川の薄氷

解けてぞいと袖はぬれける

と云ふ自作の和歌を縫ひあらはしたものを着て、人眼を聳させながら、八の字を踏んだと云ふ。

勝山鬘、丹前踊の流行も、みな此の勝山から出たものである。

西田屋——九重

昔は随分珍妙な裁判や判決があつたものである。——本所三ツ目の或る武家に、ある女が乳母勤めをしてゐた。すると其の育てゝゐる主人の子供が、ふとした事で隣家の子供と喧嘩をして、石を打つけたか、棒きれで打つたかして、その隣家の子供に怪我をさせた。すると其の子供は、その怪我が基で死んでしまつた。それが訴訟になつて、時の町奉行大岡越前守の手で裁かれる事になつた。その結果、その殺した子供の乳母が罪を受ける事になつて——どう云ふ譯か今の人間には解らないが、——吉原へ五十年間身を沈めると云ふ判決が下された。それで訴訟は事済みになつたが、乳母であつた其の女は遊女となつたのである。

その女と云ふのが九重である。——抱へ主は、吉原江戸町の西田屋又右衛門であつた。

——生れは京都の五條である。

そんな不慮の出来事の犠牲になつた彼女は、元來が非常な親思ひで、孝行人人であつたから、常に故郷の父母の安否を氣遣ひ、時毎に珍らしいものなどを送るのを忘れなかつた。そんな風で、心ばえも美しかつたつし、遊藝文事にもたけてゐたので、なか／＼の全盛であつた。

ある時、浮ぶ瀬もない自身の境遇を悲しんで、

はる／＼と遠きあづまに隅田川

絶えぬ流れをいつまでか汲む

と云ふ歌を詠んだのが、時の奉行の耳に入つたので、「不憫な事である」と云ふ情から、急に勤めの身を許され、郷里へ歸る事が出来たと云ふ事である。

玉屋——琴柱

天明年間に吉原玉屋の狭妓として名を傳へられてゐる。琴柱の情人に増上寺の所化で靈瞬と云ふのがあつた。この靈瞬から、金さへあれば京に上つて立派な僧侶になれると云ふ話を聞いた琴柱は、身の廻りのもの一切を曲げて修業の金を調へ、それを靈瞬に渡し、「どうぞ早く出世して下さい、そしてそれまでは決して妾の許へは來ないやう……」さう云つて別れたが、間もなく自害して果てた。

靈瞬は、この女の強い情に感激して、その後京に上り、遂に後年大僧正となり、聖譽上人と號したが、全くこれは琴柱の賜であつた。修業中も、靈瞬の心がともすれば迷つて、紅燈の巷に踏み入らうとすると、不思議にも琴柱の亡靈が何處よりともなく眼の前に現はれて、それを遮り止めたと云ふ。

茗荷屋——奥州

江戸吉原茗荷屋の太夫で、艶色一世に聞えてゐたと共に、文事にたしなみが深く、殊に和歌に秀れてゐた。非常に床しい風情の女であつたらしい。

ある客が、奥州と一夜逢つて、心かれ惚れ込んでしまつた。然し、話をしてゐる中に、何か其の客にきざな處でもあつたのか、奥州の方ではすつかりきらつて、その夜も肌はゆるさなかつた。

然し、奥州の艶姿に魅惑された其の客は、間もなく或夜また揚屋へ來て、奥州を呼んだ。彼女は夫れが先夜きらつた客であると知ると、附添ひの者に命じて、自分の提灯の一方に、

貞清美夫胎

と漢字で書かせ、その裏手の一面に、これにいつはりはない

と假名で書いて来させ、それを灯して、その客のゐる揚屋へ行つた。

その文字を見た客は、非常に愧入つて、

「貴女を、あたりまへの遊女と思つたのは、私の誤りであつた。」

と云つて、その儘歸つて行つたと云ふ。

自作の歌一首を掲げる。

たぞやたぞ誰かは今日のまゝならむ

定めなき世に定めなき身は

信濃屋——薄雲

萬治の頃、江戸吉原の廓に艷名を謳はれた太夫であつた。信濃屋藤左衛門の抱へである。濃麗花の如き姿と、女に似げぬ稜々たる氣骨が、當時彼女の名を一層に高くさせた。俳諧も上手であつた。

ある藩主に戀したはれて、半年ほど通ひつめられたが、薄雲は何をきらつたか、どうしても肌をゆるさなかつた。

氣の長いやうで、我儘なお大名は、この態度に少なからず腹を立て、意氣地になつた。

そして三千兩と云ふ大金を投じて、薄雲を根引し、藩邸の一室に閉ぢ込め、邪が非でも自分の意に従はさうとした、然し女はどうしても承知しない、ますます痼癩を起した大名は、

「これほど迄でにしても余が心に従はぬのなら、一日に指一本づつを切つて、十本を切りつくした十日目に殺してしまふが、それでも云ふ事を聞かぬと云ふか。」
と云つて、強迫したが、薄雲は

「澤山ゐる女の中で、それほど迄でに仰せ下さるお心ざしは嬉しう存じまするが……かうなりました今では、なほ更仰せに従ふことが出来ませぬ、……どうして此のやうにまで仰せ下さいますのを、お受けする事が出来ませんか、私自身にもわからぬほど、今更に己と己の心が怨めしう存じまする。また此の様な女に、お心をおひかされ遊ばした殿様を、お氣の毒に存じ上げます。」

さう云つて、遂に無残な悪劍の錆と消えて、散り失せた。——彼女は秀れた文章家で、その最後に残した遺書は、切々として讀む人の胸を打つものがある。次は自作の俳句、

初雪や誰が誠もひとつ夜着

飼猫の香にひかれてや梅の奥

荒町屋——泊瀬川

雪の國、越前の三國荒町屋の遊女であるが、俳諧をもつて當時文人の間に名を知られてゐた。

さそふ水あらばくと螢かな

たゞいても心の知れぬ西瓜かな

は彼女の作である。

或る時、江戸の去る大名が、泊瀬川の文名にあこがれを持つて、「是非一眼逢ひたいが、もし暇があつたら訪ねて来てくれ」と云つて寄越した。

その後彼女は、主人に頼んで、自分で百日だけの身代金を拂つて暇を貰ひ、行脚の姿に

身をやつし、江戸にやつて来て、その大名を訪ねた。

大名は、思ふに違つた、その行脚姿を不思議さうに眺めて、

『なぜそんな姿でまゐつた。』

と尋ねた、すると彼女は笑ひながら、

『俳諧の修業のために参つたのでございます。』

と答へたので、大名も其の床しい心根に感じ、他の諸大名などにも紹介した上、遊藝や

俳諧などをさせて、種々なものを賜つた。

やがて日敷が来て、郷里へ歸らうとした時には、彼方此方から贈られた錢別が、五匹の馬におはせる程あつたと云ふ。泊瀬川は、樓に歸ると、その錢別を全部主人にやつてしまつて、一物も自分のものとはしなかつた。

その後、何を感じたか、樓を出ると、出村と云ふ處に庵を造り、尼となつて一生を獨身で送つた。——寛永三年の生れで、七十三歳の長壽を得て世を去つた。

辻 君——三千歳

去る藩の大名が、淺草の觀世音に参詣した時、堂のなかに奉納されてゐる額を眺めてゐる中、ふと、

さ夜衣こよひはたれと契らむ

わがつまならぬつまをかさねて

と云ふ歌に心をひかれた。大名は、その額の奉納者が誰であるかを知りたくなつた。そこで色々と尋ねさせたが、寺の係りの者も知らなかつた。

或る時、出入りの町醫者某が出仕したので、ふと此の歌の話をすると、

『それは私が存じてをります。』

と答へたので、

「では、誰が作った歌か。」

と尋ねると、

「あれは、私が知つてをります、辻君（私娼）の三千歳と云ふものでございます。」
さう云つて、醫者は委しい話をした。——ある夜その醫者は、その女の家へ行つた、すると、その女の側に、紅筆で書きなぶつた紙切が落ちてゐたので、何心なく拾つて讀んで見ると、あの歌であつた。それと氣づいた女は、耻しさうに顔を赭めて、いそいで取り上げて膝の下に押し隠したが、醫者が「それはお前が詠んだのか」と聞くと、只だ微笑してうなづいた。それで抱主とも相談した上、無理にその歌を額に書かせ、觀音堂へ奉納したのでと云ふ事であつた。それを聞いた大名は、

「心根の床しい憐れな女ではある。」

さう云つて、深く濁りに沈む女の身を憐れに思ふと共に、その文藻をなつかしんで、金五十枚を興へ、自由の身にさせたと云ふ。

島原——吉野

吉野の名は、東西に通じて大夫の代名詞のやうになつてゐる、艶姿、性行、氣品、遊藝、文事、一世に秀でたものがあつたに違ひない。

島原の太夫と云はれてゐるが、その前身たる京都六條の遊女であつた。本名を松田徳子と云ひ、西國武士松田某の娘であつたが、父が浪人した後京都に流れて來て、扇紙などを折つて其の日のたつきとしてゐた。その後父も母も世を去つて、頼るべき處もなかつたので、六條の娼家、彦左衛門方に抱へられて遊女となつた。初めは浮舟と云つたが或る時、こゝにさへさぞな吉野は花ざかり

と云ふ名吟を詠んでから、吉野太夫と改めた。

その後、豪商の息子である、石州流茶の湯宗匠灰屋紹益に愛され、根引されて其の妻となつたが、厳格な紹益の父は、それを怒つて遂に勘當してしまつた。餘儀なく二人は、京都の町はづれに佗住ひをして、それでも紹益は美しい妻と楽しい生活を續けてゐた。

冬の或る日の事である。紹益が用達しに出かけた後、俄に雪がハラ／＼と降り出して来た、思はず良人の身を案じながら門に出て、空模様を氣づかひながら見上げてゐた時、其處へ一人の老人が雪を暫し凌ぐため、その軒下に仆んだ。

吉野は、老人を氣の毒に思つて、丁寧に座敷に招じ、茶を點じ、菓子を用意して、雪の小やみまで心をこめて歡待したのであつた。——老人は、その若い人妻の、床しい物腰や上品な言葉遣ひに、深く心を魅せられた。老人はこんな婦人を、自分の子息の嫁にしたら、どんなに嬉しい事であらうと思つたりした。

この老人こそ、紹益の父であつた。然し父も吉野も、其の折それと知らう筈はなかつた。

老人は歸宅してから、その床しい婦人の事を、出入りの本阿彌光悦に物語つた。すると光悦は微笑みながら、

「その方こそ、貴方の御子息紹益様の御内儀でございます。それほど其の嫁御がお氣に召したのなら、どうか御子息の勘當を許して上げて下さいまし、あの方は、ほんとに立派な方でございます。決してありふれた遊女とお思召してはいけません。」

さう云はれて、老人の心も初めて安らかな喜びに満ちた、そして間もなく、紹益夫婦は父の許しを得て家に入つた。

然し、その喜びも永い事ではなく、吉野は三十一歳の盛りで、寛永八年八月二十五日に世を去つた。紹益は餘りの悲しさに、

都をば花無き里になしてけり

吉野を死出の山に移して

近世名僧の奇行逸話

桃 水

奉仕とか行乞とか云ふ言葉では言ひ現はせない、もつと超越徹底した尊い生活にひたりながら、漂々として流れる水の如く、身を乞食の群に投じて、止めなき旅を續けた一代の大徳奇僧の彼に「乞食桃水」の名あるのもふさはしく、懐しい。

桃水は筑後の生れで、諱を雲關と云ひ、肥前國島原禪林寺の住職であつたが、深く悟る處あつて、漂然として寺を捨て、旅に出た。そして行く處を知らなかつた。

彼に歸依してゐた尼の某が、その後間も無く彼の後を慕うて旅に出て、尋ね廻つて數年の後、ふと師僧を見出した時、尼はどんなに喜び且つ驚いた事であつたらうか。それは京都洛東四條河原のほとりで、其處に集ふ乞食の群のなかであつた。桃水和尚は他の仲間と同じやうに、荒蕪をかついで、或る一人の病んでゐる乞食を熱心に介抱してゐた處であつた。

その姿を見出して、それが桃水であると知つた時、尼は思はず跪いて、涙にむせびながら手を合はしたのであつた。——暫くして尼は、師僧の爲めにと、自分で絲を紡ぎ、織り上げて作つた夜具を、はるく脊に負うて來たので、それを取り出し、桃水の前にすゝめたが、桃水は、

「志は受けるが、今の身では用ゐやうがない。」

と云つて受けないので、尼は、

「和尚さまがお使ひになれずば、お心の儘に遊ばしませ、私は和尚さまに御供養いたし

ました上は、直ぐにお捨てになつてもお恨みには存じません。』
と云つたので、桃水は、

『では、忝けなく貰うて置く。』

と云つて受納め、すぐ病んでゐる乞食に打ち着せてやつた。これを眺めた他の乞食たちが「これは只だの乞食では無かつた」と知つて、俄にあがめ尊むやうになつたが、桃水はそれがうるさいのか、また其處も立去つてしまつた。

その頃、二人の弟子の僧が、同じやうに桃水を探ねて國を出で、旅から旅へと三年の月日を送つてゐた。そして京都の安井門前と云ふ處で、漸く和尚を乞食の群のなかに見出したのであつた。で、

『どうか私たちも御一緒にお連れ下さいまし、同じやうに姿を變へてお供いたします。』

と云つて頼んだが、どうしても桃水は承知しない。それで一人の僧は他の智識の處へ行ぐやうに手紙をつけて無理に去らせられた。今一人の僧は、押して師僧の後へつき従うて

離れなかつた。すると桃水は笑ひながら、

『それほどに云ふなら、……私がする通りの事が出来たら、一緒に連れていつてやらう、

では、まあ来い。』

さう云つたので、喜んで後に従つて云つた。暫く行くと道ばたに一人の乞食の、行倒れて死んだ屍があつた。桃水はそれに經文を誦してから、弟子に手傳はせて側に穴を掘りその死骸を埋めた。すると其の乞食の倒れてゐた側に、何か食ひ餘したものが汚い椀のなかに残されてゐた。それを見つけると桃水は、

『これは勿體ない、頂かう。』

さう云ひながら一口甘さうに食べた後、

『お前も食べて見ろ。』

と云つて弟子の方に差出した。弟子も餘儀なく其の椀を受けて、少し口に入れて見たが、死人の食ひ餘しと云ひ、その腐つた匂ひ、きたなさ、口に入れると共に思はず胸が突きあ

けて、嘔いてしまった。桃水はそれを見るとカラ／＼と笑ひながら、
『だから云はぬ事か……それが食べられぬやうでは、此の生活は出来ぬのぢや。もう歸
るが好い。』

さう云つて、弟子を残して何處ともなく去つてしまった。

——後年、桃水が大津の驛で草鞋賣りをしてゐた時、或る人が大津繪の阿彌陀佛の像を
贈ると、彼は夫れを自分の小屋にかけ、消炭で、

せまけれど宿を貸すぞや あみだ殿

後生頼むとおぼしめすなよ

と、その像の上に記してゐたと云ふ。——遷化は天和元年三月であつた。

良 寛

涙ぐましい程、自然そのものゝ姿で、無我に生きた良寛には、傳へ残された逸話奇行
が數知れずある。

良寛は、獨り靜に日向ぼつこになつかしむのが好きであつた。さうした時、彼は自分
の着物から一つ一つ虱を捕り出して、それを丁寧ていねいに紙の上に並べて這ははせ、獨り眺めて樂
むのである。

やがて、それも飽きると、その捕り出した虱を、また一つ一つつまんでは、自分の肌衣
のなかへ返してやるのであつた。

のみしらみ音に鳴く秋の蟲ならば

無能

陸奥の無能和尙は、淨土宗の大徳で、四十未滿の遷化ではあつたが、その間の自行化他の行業は類のないものであつたと傳へられる。

彼の若い時は、傳記に「地藏菩薩の化身」とあるほど、比類なき美貌の持主であつた。或る年行脚して某家に宿をとつた折、その家に一人の美しい乙女がゐた。その乙女は一夜の宿を貸した若い美僧を一眼見て、燃えさかる情慾をどうする事も出来ない戀心に悶えさせられた。

堪えられぬ情熱の炎にあほられて、乙女は夜の更くるを待つて、秘に美僧無能の宿る寢

室へと忍んで行つた。

その時無能は、常座不臥の教へに従つて、屏風をめぐらした中央の寢床の上に端座して、靜に微音で念佛を唱へてゐた。——尊い程行ひすました氣高い其の僧形も、戀の情炎に燃えたゞらしてゐる乙女の眼には、只だ美しい繪のやうな姿としかうつらなかつた。乙女は忍び得ぬ熱情にかられて、耻しさも忘れて思はず美僧無能の後に走り寄ると、ひしとばかりに抱きついた。

然し無能の身體は寸毫も動がなかつた。彼は平然として、吾を忘れた人のやうに、靜に念佛を唱へてゐた。——柔ひ白い手、ぬくぬくと迫る女の肌の温み、艶いた白粉の香り、——それが何の感じも與へぬのか、念佛の聲は靜に美僧の口からもれ、身動きさへなかつた。

半時ばかり、じつと女は無能の身體を抱いてゐた。でも何の變りはなかつた。まるで、魂の無い人形のやうであつた。——やがて、女は憔悴として去つて行つた。

その翌朝から、乙女は氣が狂つた。無能は憐れに思つて、念佛を授けて漸く病を癒やしてやつたが、乙女は其後も念佛に親しんで終生嫁さなかつたと云ふ。

玄

砂

洛東智恩院光玄院の住職で、まだ若かつたが、いたく世を厭ふ心が深かつたと見え、人の交りも物憂いのか、その院の側に庵室を設けて、机一脚を据ゑ、其處に入つて讀經佛道の精進に終生を捧げてゐた。

従つて檀家の者が訪ねて來ても、下男が出て來て逢ふのみで、口をきくと云ふ事もなかつたので、親しむ者もなかつた。

そんな風で、自分の住持する光玄院の事は、少しも構はない爲め、寺は徒らに朽ち果て、

雨が降れば座敷も庫裡も水にひたり、まるで無任同様の有様であつた。其處で檀家の者たちは、皆な憤慨して「あの坊主は何時も寺を明けてばかりゐて、ちつとも自分の寺の面倒を見ない碌でなした、その癖檀家からの施物は遠慮も無く取りつ放しでゐる、あれが眞實の坊主丸儲けと云ふ奴だ」などと云つて、誹つてゐた。然し、あまり寺の建物がいたんで來たので、其の儘にもして置けず、餘儀なく檀家の者が寄り合つて相談をした結果、院の修理をしようと云ふ事になつた。

この話は、まさか下男と逢つて濟ませる譯に行かない事なので、院主の玄砂に面會する事になり、檀家が寄合ひの結果を委しく話すと、

「萬事は宜しく願ひします。……その費用には、日頃頂いてある施物が溜つてをりませうから……」

と云つて、自身立上つて、其處此處の袋柵や、疊の下、鴨居の上などから取出したが、それは又、夥しい金高であつた。

檀家の者も、これには勘なからず面喰つて、始めて玄砂の尊い性格に敬服し「兼て考へてゐた方とは違つて、金銭などに淡泊な尊いお方であつた」と、其の後は心から歸依するやうになつたと云ふ。

然し玄砂和尚は、その庵室も兎角うるさくなつたか、一時鞍馬山の東に庵を結んだが、また其處も去り、更に人里離れた高雄山の麓に移り住んで、ひたすらに精進した。

大 舎

大舎は頼山陽等と親交の厚かつた、當時の傑僧であつた。

或る夜の事、獨り机によつて書物を讀んでゐると、突然一人の強盜が抜刀を提げて入つて來た。大舎はそれを見ると、デロツと鋭い眼を賊の面に投げながら、沈着いた聲で、

「何の用か？」

と尋ねた。賊は、一寸面喰つた形だつたが、

「金を貰ひに來たのだ。」

と云つた。すると大舎は、傍にあつた財布を取り上げ、賊の前に投げ出しながら、

「之れを持つて行けッ。」

さう云ふと、また靜に書物に眼を向けて、賊の事などは忘れたやうな風であつた。賊はその財布を握ると、コソ／＼出かけて行かうとした。と、

「待てッ。」

と大舎が怒鳴つた。この聲に、賊は思はずブルツと身を慄はせて居すくんだ、その顔色は蒼白に變じた。

「後の戸締りを忘れるな、この頃は用心が悪いからな。」
カラ／＼と笑つて、大舎は又、書見に親しむのであつた。

—その後、此の強盗は間もなく捕つたが、
「今までに随分恐しい目に逢つたが、あの坊主に待てツと、云はれた時ほど度膽を抜かれ
た事はなかつた」と述懐したと云ふ。

風 外

高僧風外和尚は、年老いてから相模國金指村に来て、石岡の里と云ふ處へ、さゝやかな
庵を結んでゐたが、或る日の事、突然、

「私は、今日死ぬのだ。」

と云ひ出し、近所の百姓を呼んで、錢三百文を與へ、穴を埋るやうに命じた。百姓も半
信半疑ながら、命令られたやうに、穴を掘り上げると、風外は待ち兼ねたやうに、いきなり

其の穴の中へ飛び込み、

「さあ、これで好い、土をかけてくれ。」

と云ふのであつた。百姓もあまりの事に驚いて、生きてゐる人の入つてゐる穴へ、土を
かける譯にも行かす、くづくしてゐると、

「さあ、早く土をかけないか。」

と急ぎ立て、どうしても承知しないので、百姓も仕方がなく、上から少し土をかける
と、風外は立つた儘經文を高らかに唱へたが、やがて合掌姿の儘息が絶えてしまつた。

百姓の知らせで、名主も驚いて駆けつけたが、其時は立木の如く、和尚は大往生を遂げ
てゐた。

鐵眼

諱を道光、肥後國本願寺末下の寺に生れ、既に妻帯をしてゐたのであるが、深く悟る處があつて黄蘗山に登り、木庵禪師に教へを受けてゐた。

妻は、良人の鐵眼が何時までも歸らないので、その後を慕つて黄蘗山に来たが、尋ねて行つても逢つてはくれまいと思つたので、寺の門前の旅宿に泊つて、良人の出て来るのを待つてゐた。或る日果して出て來たので、漸く鐵眼に逢ふ事が出來た、其處で心の寂しさを訴へ無理に郷里へ一緒に歸つてくれるやうに頼んだ。鐵眼も餘儀なく妻の乞ひに任せ、山を下つて國へと志したが、郷里の地へ足を入れて、妻が安心した隙をうかどひ、また走り逃れて、黄蘗へ歸つてしまつた。

法を嗣いだ後、攝津國難波村瑞龍寺を建立した。今に鐵眼寺と稱されてゐる。その後彼は、一切經の藏板を思ひ立つて、自ら勸進して歩き、漸く資金が集つた頃、非常な饑饉が國々を襲ひ、饑に死ぬ者が絶えなかつたので、その金を残らず施してしまひ、更に又勸進して金が集つた折、再び凶作が續いて饑になやむ者が多かつたので、更に其の集めた金を施行し盡した。然し、鐵眼の徳は大きかつた、三回目の勸進に努力した結果は、再び金が集つたので、之れで漸く一切經印刻の目的が貫徹したのであつた。

圓空

美濃竹ヶ鼻と云ふ所の人である。幼い折出家し、或る寺に居つたが、二十三歳の時から漂浪の旅に出で、富士山や、加賀の白山に籠つて行を積んだ。後、飛彈の袈裟山千光寺と

云ふ寺に長く足を止めてゐた。

圓空の持つてゐるのは、鉈一丁だけであつた、何時もこれで佛像を刻んで、生活の代とし慰樂としてゐた。――袈裟山にも立ちながらの枯木に刻した仁王がある。――物事を占ふのに百發百中で、彼の言葉を信じない者は無い程であつた。

或る時、高山の藩主金森侯の居城を指して、

『此所には、城の氣が無い。』

と云つたが、一兩年してから、藩主は出羽へ國替へになり、城は果して外廓ばかりとなつた。

また近くに有る大丹生と云ふ池には、池の主が人を取ると云つて、誰も近づく者がなかつた。ある時圓空が其の池を見て、

『この水は近いうちに涸れて、怪しい事があり、何か此の國に災が來よう。』

と云つたので、村人も驚き、其の難を避ける方法を講じてくれと圓空に頼んだので、彼

は例の鉈で千體の佛像を刻り、それを池に沈めた。その後は何の變つた事も無く、それから一人で池のほとりへ行つても、怪しい事もなければ、人の取られるやうな事もなくなつたと云ふ。

後年、彼は更に蝦夷の地(北海道)へまで渡り、法を説き化度につとめた、その地方では今日尙ほ「今釋迦」と云つて圓空の事を尊んでゐるさうである。

雲 居

雲居禪師は、獨眼龍と呼ばれた快傑伊達政宗の歸依僧で、一代の高僧として名高い人であつた。

まだ白河に住んでゐた頃、ある日仙臺へ出かけて行つた事があつた。その折、道で政宗

の一行に出逢つたのである。雲居は藩主のお通りとあるので、田圃の隅に蹲んでゐると、政宗はフト其の姿を見つけ、

「何者だ。」

と尋ねた。雲居は、

「私は、白河の僧でございます。」

と答へると、政宗はカラ／＼と笑ひながら、

「いや、偽りを申すな。色が黒いぞ。」

と云つた。雲居すかさず、

「もはや、すみなれました。」

と答へると、政宗は更に高らかに笑つて、

「オ、面白い。……余が城へまわれ。」

その後、間も無く、迎へて瑞巖寺に入れ、厚く歸依した。

月 僊

伊勢の人で、浄土宗の僧である。彩管の道にも優れた腕を持つてゐた。その初め、餘り金銭を欲する慾が強かつたので、乞食月僊とまで罵る人があつた程であつた。然し當人の月僊和尚は平氣の平左で、金になる事なら、繪でも尻でもかくと云ふ風であつた。

ある時などは、遊女から繪を頼まれたが、それでも喜んで描いて持つて行つた。遊女はそれを蔑んで、客のゐる酒席へまで月僊を招ぎ寄せ、然も彼が描いて持つて行つた繪を腰へ巻きつけ、

「坊さんの癖に遊女傾城と云はれる卑しい妾たちに頭を下げてまで、お金が欲しいとは、何と云ふ見下げたお人だらう。」

と云はれたりしたが、それでも月僊は怒らなかつた。その噂を聞いた、親しい友の池大雅堂が、ある時月僊に向つて、「乞食とまで云はれながら、尙ほ金を得ようとする心を、どうか改めてくれ」と意見をすると、

『私が耻を忍んで金を得ようとするのは三つの誓願があるためだ。……一つは、先頃來伊勢地方が饑饉で難儀してゐる、それを救ふために先づ五百兩を山田奉行の許へ差出した。二つには、伊勢大廟附近の道路の悪いのを直したい爲めで、これも貰ひ溜めた金で何うやら修繕を終つた。最後の三つ目は、自分の寺が荒れ果て、亡き先師が夫れを氣にかけてゐた、それを修理するまで、乞食と云はれるのを咎めないでくれ。』
と云つたので、感激性の大雅は涙さへ浮べて、「尊者の心を知らなかつた」と云つて詫びたと云ふ。

環 溪

永平寺の環溪禪師は、當時大徳の智識として人々から深い歸依を受けてゐた。その永平寺の環溪に或る人が引導を頼むと、當日棺の前に鐵如意を握つて突立つた彼は、暫くじつと考へてゐたが、やがて、

涸ぬりの佛も人の案山子かな

喝！ と一喝一聲叫んだだけで、引導を終つた。

驚いたのは遺族の人たちで、環溪禪師が如何に一代の高僧であるとは云へ、なんぼなんでも俳諧一句の引導とはひどい、これでは佛も浮ばれないと云ふので、更に他の名僧の處へ行つて、事情を話して引導の行き直しを頼んだのである。

すると、其の僧が、環溪の俳諧引導の一句を聞くと、すつかり感心してしまひ、
 「そんな立派な引導が他の者に出來ようか、千部萬部の經を讀む功德だつて、これには
 及ばない。仕直しなどゝは以ての外ぢや。」
 と吐り飛ばされたと云ふ。

穆山

近代の名僧穆山和尚が、もう七十六歳の高齡に達した時であつた。折柄夏の事、出先で
 食べたうどんが障つたか、その夜から腹痛と下痢がはじまつて、遂に赤痢に罹つてしまつ
 た。其處で交通遮斷、面會謝絶と云ふ事になつて専ら療養を盡した。

何しろ老齡の事ではあり、病症も重かつたので、日に日に衰へて、骨と皮の枯木のや

うな姿になつた。それでも穆山は床の上で書見を止めない。一心に「元字脚」と云ふ佛書
 を讀んで、朱筆まで入れ「治つたら此の講義を聞かしてやる」と云つて、弟子たちを一層
 心配させた。それで弟子たち一同が懇請して、暫く書見を中止なさるやうにと熱心に勧め
 たが、和尚なかく云ふ事を聞かない。

「なに、放る方は放る方だし、見る方は見る方ぢや。」

それでも、奇蹟的に病氣は治つて「元字脚」の講義をした。そして逢ふ人毎に、

「本を讀むには、交通遮斷の赤痢が一番好いよ。」

大薩

「尾張の大薩」と稱へられた、名古屋大光院の和尚大薩は、近い頃での名僧として尊ばれ

た人であつた。

その大薩が、何處かの寺の炊事係をしてゐた小僧時代であつた。或る日食事の最中、坊さん達の間に大騒ぎが起つた。それは汁桶のなかから、一匹の蛙が現はれたと云ふためであつた。

「これは、何んぢや。」

さう云つて、炊事係の大薩の眼の前へ、一人の僧が蛙をつまみ出して示した。

『あゝ、……これは茄子ですよ。』

と云ふと共に、いきなり其の蛙を掴み取ると、自分の口へ入れて、ムシヤ〜と、然も甘さうに食べてしまつた。

これには、誰一人重ねて苦情を云ひ出す者がなかつた。

鄧 州

明治大帝御大葬の當夜、大君の御後を慕ひまゐらせて、乃木大將夫妻が殉死したと云ふ報道が報へられると、全国各地から寄せられる弔電の数は、實に數限りないのであつた。それを近親の人たちが一々封を披いて讀んで行くと、中に一通、

パンザイ、パンザイ、パンバンザイ

と云ふ文句の電報があつた。この文句に驚いて、急いで差出人を見ると、

ナカハラトウシウ

とあつた。——明治の傑僧、南天棒こと中原鄧州その人からの弔電であつたのである。

幕末勤王烈士の逸話

蒲生君平

尊王攘夷の第一線に活躍した情熱漢であり、一面篤學の人であつた君平は、また飄逸で洒脱な一面の持主であつた。

君平が未だ若い頃の事、彼は當時著名な學者で下野鹿沼にゐた鈴木石橋の家で世話になつてゐた。——或る日の朝、石橋の妻が厠に入つて見ると、中が一面に糞便で汚されてゐる。これはきつと君平の仕業であらうと思つたので、君平を呼んで其の掃除を命じた。

然し、それは君平のした事ではなかつた、でも彼は夫れを辨解しようともせず、溫和しく其の命令を承知した。其處で早速掃除にかゝらうとしたが、折から嚴寒の事で、厠のなかの穢物はすつかり凍り固つて、なか／＼拭き取る事が出来ない。これには君平も困つたが、ふと何か考へついた事があつたか、彼はニヤリと獨り笑ひを顔に浮べながら、何喰ぬ顔で石橋の妻の處へ行つた。そして、

『ちよつと火熨斗を拜借さして下さう。』

と頼んだ。妻は何の事だか解らないが、乞はれる儘に火熨斗を出して渡した。彼はそれを受取ると火をそれに盛り、それを持つて便所場に行き、凍りついた汚物の上を其の火熨斗でこすり、解けた處で拭き取つた。

それと知つた石橋の妻は、一時は驚いたり怒つたりして見たが、もう後の祭であつた、君平は濟した顔で、獨り自分の智慧に微笑んでゐた。

頼三樹三郎

頼山陽の子で、火の様な熱血兒であつたが、その少壯時代は兎角傲慢に流れて、やたらに人に喧嘩を仕掛ける癖があつた。

或る日、京都丸山の書畫會に往つて、當時の學者、詩人、畫家などの酒宴に列つたが、相變らず酒の酔ひが廻ると、三樹は同席の池内陶所に向つて、盛に侮辱の言葉を投げつけて、喧嘩を仕向けるので、流石の陶所も激昂して、三樹の無禮を咎めた。すると彼は益々怒つて、やがて刀を抜いて陶所に向はうとしたが、同席の者が驚いて仲裁に入つたので、漸く其の場を治めた、かうした事は常であつた。

然し、三樹は、やたらに刀を抜くが、それは只だ脅して、一度も人を斬つた事がない處

から、人々は三樹を綽名して「猫の尾」と云つて蔭で笑つた。

この「猫の尾」も、後年時勢の變に際會し、國事に奔走するやうになつてから、その志を持する事も高くなつて、全く面目を改めた。

橋本左内

左内が、まだ十歳の頃であつた。ある日父に伴れられて、半井と云ふ醫者の邸で催される、蘭語の研究會の席に列した。やがて講義が済んで、人々が歸途につかうとすると、幼い左内が半井先生に向つて、

「次の會に寄り合ひます時まで、どうか只今御講義になつた御本をお貸し願ひます。」と頼んだ。半井先生は「なにを小供のくせに生意氣な、蘭學の原書を貸りて行つて何が

解るものか」と思つたので、

「これはお持ちになつてもお解りにはなるまい。」

と云つたが、左内が尙ほ熱心に頼むので、それではと云つて貸し與へた。

左内は、喜んで夫れを借りて歸ると、早速母に頼んで和蘭語の辭書を買つて貰ひ、朝は早くから夜は遅くまで、一生懸命に辭書と首引きで其の本を讀んだ。

やがて次の研究會の日が來て、左内が出席して此の前借用した原書を返すと、半井先生は笑ひながら、調戲半分に、

「解りましたか。」

と尋ねた。すると左内は、

「ハイ。」

と答へた。先生も不思議に思つて、彼に讀ませると、スラ／＼と淀みもなく讀むので、今更に驚き、なほあれから一心に辭書と首引きをして獨學した次第を聞いて、深く感服し、

「御志に感ずるまゝ、この原書は差上げませう。」

と云つて左内に與へた。彼の秀れた才能と努力は、この頃から既に鋭鋒を現して來たのであつた。

平野國臣

國臣は十二歳の時に、福岡藩の小金丸彦六の養子となり、後、同家の三女を妻として二男一女を設け、同棲二十年の久しきに亘つたが、國家多事の際、身を捨て、忠勤を勵む考へから、遂に偽つて狂者となり、離縁して平野家に復歸した。

それは、月が皎々と澄み渡る空に輝いてゐた或る夜であつた、彼は横笛を吹きながら、福岡の西町を逍遙してゐると、何處からか、一人の愛らしい子供が駈けて來て、その袖に

取りつきながら、

「お父さま、お父さま。」

と呼ぶので、笛を止めて、ぢつと月に照らされた子供の面影を眺めると、それは小金丸の家に遺して置いた、愛しい我が子であつた。流石の君國に殉ぜんとする國臣の心緒も、どんなにか亂れた事であつたらうか。彼は涙をかくし、すかしなだめて漸く我が子を生家へ歸らせたと言ふ。

我が心岩木と人や思ふらん

世の爲め捨てしあたら妻子を

世の爲に捨ては捨てしが年経ても

忘れぬものは我が子なりけり

いと惜み悲むあまり捨てし子の

聲立ち聞し夜のありけり

切々と胸に迫る、悲しい述懐の歌ではある。

山縣大貳

彼の竹内式部と共に、勤王の先驅者として王道の尊きを説いた大貳は、元甲府の與力であつた。兵法、天文、律令、地理、算數、醫藥に通じ、江戸に出て醫を業とする傍ら、子弟を教へてゐた。

然し、竹内式部、藤井右門など、共に企てた討幕の計劃が陸跌して、式部等の徒黨は勿論、大納言烏丸光胤以下十數人が、官爵を褫れて禁固されたため、大貳はひそかに信州上田に遁れ、姓名を變へて塾を開き、郷黨を集めて學問を教へてゐた。

或る日、論語を講じてゐると、一人の門人が顔色を變へ、あわたとしく入つて來て、

「江戸表で山縣大貳と云ふ者が謀反を企て、事露顯に及んだので遁亡したが。もし似よりの者でも見當つたら、早速搦めとつて差出せよと、詳しい人相書まで添へたお達しの觸れ書が、今この村の役場へも來たのですが、その人相書を見ますと、先生の御容貌に似てゐますし、風采と申し、お年頃と云ひ、一々符合してをりますので、心配のあまり、取りあえず駈けつきました。」

と云ふと、大貳は顔色一つ變へず、靜に笑ひながら、

「世の中には人相の似た者はいくらもある、そんな心配は無用にして、まあ講義でも聴くが好い。」

さう云つて、何時もの通り、豫定の章まで講義をつゞけて、平然たるものであつた。

眞木和泉

京都で、勤王の志士たちが會合した席上で、

「お互に、國家に盡す爲めには小さい慣はつゝしむ事にしよう。」

と誓約した。それを云ひ出したのは、西郷吉之助（隆盛）であつた。暫くしてから、同席の眞木和泉が、つと立上ると、西郷の前に進んで、いきなり其の頭をボカリと擲つた。

「何をなさる。」

と西郷が思はず眼を見張つて立上ると、

「西郷さん、痛かつたか。」

「無禮なツ。」

一刀に手をかけようとした刹那、和泉は「ハツハ、、、」と大きな聲で笑ひ出した。

「あんたは、今さつき、お互に小憤を捨てようと言ひなされた。一同もそれを誓つた次第だ、それを此の様な事で、さうムキになつて怒られるのは、あんたの器が小さいからだ……まだ、お若いぞ。」

と云つて、更に笑つた。

「わいどんが、悪うござつた、申譯ありません。」

西郷は詫したが、——和泉の此の思ひ切つた教訓は、永く消ゆる事なく残された。

岩倉右大臣

後の岩倉右大臣も、維新前には未だ志を得ないで、岩倉村に永く閑居してゐた。

極めて貧しい生活であつたから、三度の食事に豆腐以上の御馳走は食べられなかつた。

いつも豆腐屋が通ると、それを呼び留めて、岩倉自身豆腐を買ふのであるが、その豆腐の代さへなかく拂へない事が多かつた。あまり豆腐の代が溜つて拂つてくれないから、豆腐屋が代金を催促すると、公は、あのギロリとした意地の悪い眼を光らして、

「拂へる時が来たら、拂つてやる、……まあ、豆腐を置いて行け。」

と、吐りつけるやうに云ふので、豆腐屋も仕方がなく、置いて行く。その後、毎日のやうに行つて催促するが、「今日はいけない、また来い」、そして、脅すやうにして、強請的に豆腐だけは置いて行かされる、そして代金は何時までも拂つてくれない。

豆腐屋は、岩倉公に豆腐を買はれる事を恐れるやうになつた。遂には、公の門前を通る時は、呼び込まれるのを恐れて、呼び聲も立てず、黙つてコソコソと逃げるやうにして行つた。かくて、公は、豆腐にさへありつけぬ始末であつた。

久坂玄瑞

元治元年蛤御門の戦ひに、玄瑞は遂に敗戦のなかで重傷を負うて倒れた。當時部下の一人であつた品川彌二郎は、まだ二十二歳の盛りで、亂軍のなかに奮闘してゐたが、玄瑞が倒れたのを見ると、兼て一緒に討死と覺悟してゐた品川は、玄瑞の傍に駆けよると、いきなり腹を切つて死なうとした。

と、今まで氣息奄々として、死に瀕してゐた玄瑞が、パツチリと眼を見開き、

「馬鹿奴ツ、前途のある大切な身を、こんな敗軍のなかでわざわざ失はうとする様な男なら、俺は七生まで絶交するぞ、俺は重傷を負うたから止むなく死ぬのだ。俺の志をお前たちが繼いでくれなければ、一體誰がやつてくれるのだ……大君の事を志れるな、

生命を大切にしろ。」

と、怒鳴りつけて、早く此の場を逃げ去れと促すのだ。品川は止むなく涙に咽びながら立去つた。玄瑞は、その後姿を嬉しそうに何時までも眺めてゐた。死の最後まで情味の深い人であつた。

坂本龍馬

龍馬は、柔術を信田歌之助と云ふ先生に學んだが、入門の最初、先生にブツかつて行くと、直ぐ投げ倒された上絞めつけられてしまった。

「絞めるぞ。」

「ウーム」と唸つたが、負け嫌ひな龍馬は、苦しさに手足をバタ／＼させながらも、參

つたと云ふ合圖をしない、遂には息が止まってしまった。先生は直ぐに活を入れて、息を吹き返らせ、

『どうだ。』と云ふと、

『もう一本。』

と云つて、また龍馬は飛びかゝつた。先生はまた夫れを投げて、首をギユツと絞めながら、

『落ちるぞ。』と云つたが、

『なにッ。』

とばかり、頑張つて龍馬は参つたの合圖をしない。たうとう又息を止められてしまった。其處で先生は活を入れて息を吹き返らせると、氣がつくかつかない中に、また、

『もう、一本。』

と云つて飛びかゝつて行つた。流石温厚な先生も、あまりの強情さに業を煮やし、龍馬

の胸ぐらをつかまへると、道場の隅に引きずつて行つて、羽目板へイヤと云ふ程ぶつけた上、今度は首を絞めても、息の止まるまでにはせず、ギユツと絞めては又ゆるめ、緩めては又ギユツと絞めて、生きみ殺さずの苦しい目に逢はせた。これには龍馬も閉口したらしいが、それでも未だ参つたをしない、やがて先生の方がくたびれて、手を放すと、

『先生、真中で願ひませう。』

と、またしても立向つて行つた。

先生も、これにはすつかり惘れて、龍馬が立歸つた後、

『俺も、随分負け嫌ひな奴にも出逢つたが、龍馬のやうな強情な人間には、まだ逢つた事がない。……然し、末怖しい奴だ。』

と述懐したと云ふ。彼の片鱗が窺はれる。

松本圭堂

大和十津川に討幕の兵を擧げて破れ、惜しくも陣没した圭堂は、智謀に秀れた快男子であつた。

彼が未だ昌平費に學んでゐた時の事である。或る日友人たちと一緒に、料亭に遊んで痛飲して歸つた。その折一人の友人で、金を持つてゐながら、當日の酒食の代を拂はなかつた者があつた。彼は其の卑しい行爲を非常に憎んだ。そして面責した。その上血の氣の多い情熱的な圭堂は、腹立ちの餘り、側にあつた火鉢をとると、その友人に擲げつけて亂打した。

それが、費の規則に觸れて、遂に退費を命ぜられる事になつた。

圭堂は平氣なものである。愈よ昌平費を退くと云ふ日、眞晝間だと云ふのに、行燈に灯をともし、それをぶら下げながら、

「こんな暗闇のやうな學校にゐられるかい。」
さう云ひながら、悠然と出て行つた。

大久保利道

幕府が長州征伐を行はうとした時、時の老中は薩藩の大久保利通を呼んで、種々諭した上、薩藩からも兵を出させようとした。その折利通は聲の眞似をして、先方の話を全然取り違へて聞いた様子をし、さも驚愕したやうに扮ひ、

「將軍に罪があるから、之れを討てと仰せられても、我が藩が兵を出して將軍に手向ふ

と云ふ事は、情誼の上から忍びない事と存じますが、是非兵を出せとなら、一應主君にお伺ひいたしましたして、何分の御返事を致しませう。』

と云ふので、老中が驚いて、その聞き誤りである事、兵を出せと云ふのは長州藩に向つての事である事を、詢々と説き聞かせたが、利通は最後まで聾の空耳で通して、老中一統を面喰せたと云ふ逸話があるが、彼は押し強い、沈黙寡言、實行を旨とするといふ風があつた。

明治になつてからの事である。當時歐洲から歸朝した鮫島尙信が、直ちに利通に面會を求めて、歐洲の事情を説き、その文明を讚美し、延いて日本の改革に論及して滔々數萬言を費したが、利通は終始冷然として、一言も出さず聞いてゐた。鮫島は尙ほ口角泡を飛ばして喋舌つてゐるのを、デロリと一瞥した利通は、指の間に挟んでゐた葉巻の吸ひかけを、喋舌つてゐる鮫島の口のなかへ、いきなり押込んだ。

「アツ」

と云つて、葉巻を吐き出した鮫島は、只だ呆然として、眼をバチ／＼させるばかりで、もう後の言葉は出なかつた。

西郷隆盛

まだ吉之助と稱し、千鳥なく鴨川の流れる京洛の巷に活躍してゐた頃の事である。

或る夜、同志の友と共に、某料亭に快飲したが、宴が酣になつた時、一人の美しい藝妓が舞つた、吉之助はその女に向つて、

『お前の踊りは美事だつた。褒美に着をやるから受ける。』

と云つて、傍の火鉢に眞赤におこつてゐる炭火を火箸につまんで差出した。當時意氣を持つて賣つてゐた其の藝者は、靜に晴着の袖を出して受けた。一座はヤンヤと喝采した。

——然し、大切な晴衣装の袖を焼き切つてしまつた藝者の心のうちは、餘り面白いものではなかつた、どうかして一つ敵討がしたかつた。

その中、吉之助も聲を張り上げて、詩を吟じた。すると其の藝者は、

「あなたの詩吟もお上手どしたわ、……お肴あげまほ……」

と云つて、眞赤な炭火を火箸ではさんで差出した。吉之助はニツコリしながら、

「これは忝けない。」

さう云ふと、煙管を取上げて、その火で一服すつて、うまさうに紫の煙を天井に吐いた。

「あなたには、かなわん……」

と、藝者は口惜しさうに云つた。——彼女は、筒袖の着物を着てゐる吉之助は、受ける袖がないから、恐らく手を出さであらうと思つてゐたのであつた。彼にはこんな機智もあつた。

まだ、弟の従道と同居してゐた頃、或朝急用で、吉之助獨り先へ飯を食つて出て行つた。その後で膳に向つた従道が、吸物を吸つて見ると丸で鹽氣がない、白湯で豆腐を煮たものだつた。少し中腹で炊事の婆やを呼んで吐くと、これも驚いた様子で、「實はあまり急ぎましたので、つひ味をつけるのを忘れてしまひました」と云ふ。

「それにしても、兄上が何とか云はれたであらう。」

と聞くと、婆やは一層恐縮して、

「いゝえ、なんとも仰しやらず、みんな召し上つてお出でになつたので、私も今まで心づかないでをりましたのです。」

これを聞いた従道は、「俺はとても兄貴には及ばない」と、染々嘆息したと云ふ。

伊地知正治

貧乏と儉約とで同志の間に有名であつた。

やはり維新前の事、江戸に来てゐた西郷隆盛が、大事の計劃上、急に薩摩へ歸らなければならぬ事が突發したが、大切な旅費が無い。大久保や黒田などの同志に相談して見たが、金策が出来ない。そこで西郷が、「では一つ伊地知に相談して見よう」と云ふと、他の同志たちは、

『あの貧乏で吝嗇な奴が、有りもしまし出しもすまい。』

と云つて、口々に笑つた。然し、兎に角窮した擧句の事だから、西郷は正治に逢つて相談すると、

『君の歸國は、この際天下の一大事だから、これを使つてくれ。』

と云つて、内懐から革財布を出して西郷の前に置いた。中を開けて見ると、燦然たる小判が六十兩入てゐた。——以來、同志は彼の事を、決して貧乏だの吝嗇だのとは云はなくなつた。

近世名人奇行逸話

稻村三伯——醫道——

三伯は鳥取の藩士であつたが、蘭學醫術の名手として、當時海内に名を謳れた人である。その彼が未だ修業中の青年時代の事であつた。或る年同藩の難波春庵と一緒に長崎に赴き、蘭醫に就て蘭學と醫術を學び、業を終へて遙々と故郷へ向つて歸途についた。すると途中で貧しい旅費を使ひ果し、さて之れから何うしたものかと、二人は思案投首の態で、吐息をつきながら、重い足をひきずつて歩いた。と、道の傍らに豪農と思しい家

があつて、その庭には一疋の牛が閑かに草を喰べてゐる。それを眺めた三伯は、何を思つたかニヤ／＼笑ひながら、春庵の顔を見たが、

「うまい事を思ひつゝ、俺のする事を見てゐろ。」

さう呟いて、ツと其の豪農の門をくぐつて、四邊に人の居ないのを見極めると、急いで牛の居る側に進みより、袂のなかから藥らしいものを取り出し、牛の食べてゐる草のあたりへ撒きちらした。そして何氣ない顔で、その豪農の表玄關の方へ行つて、案内を乞ひ、暫くの間休息させて貰ふやうに頼んだ。その家の人も、醫者らしい風采の若い二人であるから、別に怪しむ處もなく、快く休息させてくれ、何かと接待してくれた。

暫くすると、大變な騒ぎが起つた。今まで何の變つた様子も無く草を喰べてゐた牛が、急に倒れて苦しみ悶え初めたのである。その家の主人を初め、下男たちは、どうする事も出来ず、只だ狼狽するばかりであつた。その中主人が、フト先刻休息を乞うた二人の青年が醫者である事を思ひ出したと見え、早速三伯たちの休んでゐる處へ來て、辭を低うして、

大切な飼牛の急病を治してくれないかと頼んだ、三伯は頷いて、

「私たちは医者ですが、まだ牛を診察した事はありません、然し一つ薬を調合して上げませう。」

さう云つて、解毒劑を作つて主人に與へた。其處で早速牛に飲ませると、やがて薬が利いたと見えて、今にも死にさうに苦しんでゐた牛は、けろりと治つてしまつた。主人は非常に喜んで、種々饗應した上、金一封を二人の前に差出した。

やがて其の家を出た二人は、ニヤリと顔を見合せて笑つた。

「これで金が出来て、樂々と國へ歸れる譯だね。……然し蘭醫の劇薬はなか／＼好く利くよ、醫は仁術だと云ふが、劇薬と解毒劑のお蔭で、人間二人が行倒れにならないで済むなぞは、確に蘭薬の著しい効能だよ。」

三伯はさう云ふと、更に高く笑つた。

三井養安 — 醫道 —

越前府中の人で、醫道の名人として遠く其の名を知られてゐた養安は、頗る無慾で、正直で、且つ洒脱を極めた人であつた。

或る夏の事、或る人が先生の診察を受けようと思つて邸を訪づね、案内を乞ふと、「オヤ」と云ふ返事が聞えたが、それは家の中からでなく、どうも地の中からも聞えて來たやうなので、不思議に思ひながら、玄關先に佇んで待つてゐると、やがて、側にある井戸の中で何かゴト／＼音がして、其處から思ひもかけず、養安先生の頭がヌツと現はれて來た。「オヤ」と思つてゐる中に、先生は井戸からノコ／＼と出て來たが、その姿が又變つてゐる。口に煙管をくはへ、足には草鞋をはいてゐるのである。あまりの不思議な扮装に患

者の人も驚いて、

「どうなさつたのです。」

と尋ねると、養安は濟ました顔で、

「あまり暑さが激しいから、ちと涼みにと思つて、井戸の中へ入つてゐたのぢや。」

と云ふ返事に、更に憫れながら、

「その草鞋がけは……」

と問ひ返へすと、

「ウム、これか……なに梯子の昇降に、すべるといけないからさ。」

龜田 鵬齋 — 書道 —

一代の學者であり、書道の名人であつた鵬齋は、その恬淡な性格から、奇行も多かつた。或る夏の夜、知人から招待されて出かけたが、更けて歸つて來た時には、禪一つの丸裸であつた。あまりの事に奥さんが驚いて、

「まあ、あなた、どうなさつたのです。」

と尋ねると、

「途中で、溝におつこちたのだ。」

「で、お召物は……」

と聞くと、

「イヤ、溝泥だらけになつて、臭くて鼻持もならなかつたから、綺麗さつぱりと脱ぎ捨て、來たよ。」

と濟ましてゐる。

「まあ貴方、汚くともお持ち下されば宜しうございましたに、……もうお替へになるお

と濟ましてゐる。

召物がございませぬよ。』

奥さんは、泣きさうな聲で云つた。

『なに心配するな、もと／＼裸で生れて来たのだ……それに暑い折で丁度好い、當分裸で暮すことにしよう。』

奥さんも、ほ／＼笑まない譯には行かなかつた。

卷 菱 湖 — 書道 —

菱湖の書は、雪山や廣澤の後第一人であると言されてゐる程の名人であつた。只だ酒に淫するのと、酒亂のため人が懼れて近づき兼ねたものである。何時も醉中に筆を揮つた、そして、自ら、

『俺の字を見ろ、運腕の妙は、弘法と雖も恐らく及ぶ事が難いだらう。』

さう云つて、自負してゐた。事實彼の書は一世を抜くものがあつた。そのため、彼の氣嫌をうかがひながら、尙ほ書を乞ふ者が絶えなかつたのである。然し、それも四ツ時（今の午前十時）までに行つて、酔はない中に頼まねばならなかつた。

或る日、去る大名から、使者に鯛の贈物を持たせて、書を乞ひにやつた。然し使者が彼の家に着いた其の折は、菱湖は既にグデン／＼に酔つぱらつてゐた。使者が主人からの口上を申述べると、彼はフラ／＼と立上つて来たが、いきなり其の贈物の鯛を取ると、玄關の土間へ放り出した、そして、

『俺は貧乏書家だが……こんな鯛が食へるか、とつとと持つて歸りやがれ。』

と叫んで、奥へ入つてしまつた。流石に大名の使者も、啞然として引下るより他はなかつた。——當時の人も、彼の氣概は喜んだが、その酒亂はいたく惜しんだと云ふ。

世九大橋宗桂——棊道——

寛政三年に、幕府に於ける八世將棊所名人を襲つた九代目宗桂は、稀世の名人であつた。その彼が、まだ少年の頃であつた。或る日は、父の稽古場で一人の立派な侍と對局してゐた。一方は堂々たる大人であり、一方は三分の一にも足りない小坊主である、その對照は妙だが、將棊を指す大人の方は、一生懸命である。小坊主の彼が一手指す度に、大名の侍は首をひねる、時には「ウーン」と吐息さへもらしてゐる。

その中、小坊主の宗桂（當時は印壽と云つた）は、大きな相手が、長い思案にふけてゐるうちに、盤面に遊ばしてゐる二つの眼が、いつか自然に閉ぢ合ふと、コクリ〜と居眠りを初めたのである。然し相手の大人はもう夢中で、一心に盤面を睨めて指手に苦心し

てゐるばかりで、小坊主印壽の居眠りなどに、氣附かう筈はなかつた。

と、後の襖が開いて、父の八代目宗桂が顔を出した。小坊主は尙ほ、コクリ〜と夢路に舟をこいでゐる。嚴格な父宗桂の眼は鋭く光つた、父は小坊主の側へ進むと、いきなり其の小さい頭を、堅い拳固を固めて、コツンとくらはした。

「アツ」と云つて驚いたのは、叩かれた印壽ではなくて、相手の侍であつた。侍は何で師匠が子息の頭をなぐつたのか譯が解らなかつた、その人は只だ不意の出來事に、驚き呆れながら、師匠が更に加へようと振上げた手を、辛じて押へて、

「さ、早く、お父様にお詫びをなさい、印壽さん……」

さう云ふばかりだつた。然し當の小坊主印壽は一向濟したもので、別に詫びようともしない。やがて其の前にピタリと坐つた父は、怒りの眼を印壽に向けながら、

「印壽、今の態はなんだ、日頃からの戒めを忘れたのか、盤に向つて居眠りをするとは何と云ふ不心得だ、第一、對局のお方に對して無禮至極の至りだ。」

父の怒りは止まなかつた。相手の侍も、それが小坊主の居眠りと知つて、今更に啞然たるものがあつた。でも印壽は済したもので、

「でも、お父様、勝負はもう定つてゐるのです。」

「なにツ。」父は又、叫んだ、

「今の一手で、私はもう勝つてゐるのです。」

さう云ふと、印壽は落着はらつて、相手の駒を自分で動かさず、指し手の變化から、寄せ手の順序を示し、自分の勝を盤の上に現はして見せた上、

「勝負がついたから、私は一休みしてゐたのです。」

さう云つて居眠りの辨解をした、相手の侍が今更に啞然としながらも、感にたへてゐるなかで、父は、

「馬鹿ッ」

と怒鳴つたが、もう擲らうとはしなかつた。

伊藤宗看——碁道——

「看壽に七段を許すのは未だ早いと思ふ。一應私と手合せをした上でなければ許す事は出来ない。」と、

當時八段で、幕府將棊所の大橋宗興から故障が出たので、遂に其の手合せをお城將棊で決する事になり、延享二年十二月十七日、伊藤看壽は宗興と晴れの勝負をする事になつた。——手合せは、大橋八段(宗興)が右香車落ちで初められた。

この勝負は、實に看壽が七段になるかならないかの關ヶ原で、この手合せを最も痛心したの、看壽の兄で、當時名人奇才の稱があつた伊藤宗看であつた。彼は、弟の成績が心配でたまらない、それで家にて、自分も盤を出して其の前に坐り、お城に於ける兩人の

指し口を、一手一手使ひの者に報告させて、その通り駒を動かし、ジツと盤を睨んでは考へてゐた。やがて五十八手目の報告が来ると、

「ウーム、……これで、次に六九へ歩を打てば、弟の勝だがなア、……こゝを失敗つたら駄目だ。」

と、呟いたが、もう何うにも心配で堪らないと云ふ様子で、しきりと後の指し手の報告を待ち兼ねてゐた。すると、

「看壽様は、六九へ歩をお打ちになりました。」
と云ふ報告があつた。

「しめたツ。勝負はついたぞ、看壽は愈よ七段になれた。」

さう云つて、盤の駒を片づけると、

「私は、釣に行くぞ。」

その儘、さつさと釣竿をかついで出て行つてしまつた。惘れたのは門弟たちで、まだ五

十九手位で、何方も互角の陣形であつて、どうして安心が出来ようかと、不思議に思ひながら、案じてゐた。

その後數時間手合は續いた、そして百四十餘手の指し手の後、勝負は宗看の達觀の如く、弟看壽の勝になつて、七段に進んだ。

長會根虎徹 — 刀鍛冶 —

幕末京洛の巷に血の雨を降らした、近藤勇の腰刀が虎徹であつたと云ふので、名工虎徹の名は人々の頭に刻みつけられてゐるが、あの勇の愛刀は、眞の虎徹ではなかつたと云はれてゐる。——この虎徹の名が事實に於いて有名になつたのは、貞享元年八月二十八日、美濃青墓一萬二千石の藩主で若年寄稻葉石見守正休が、江戸城本丸料理の間に於いて、時

の大老堀田筑前守正俊を斬奸した折、使つた脇差が此の虎徹に打たせた新刀であつたと云ふ事からであつた。兎に角、この長曾根興里入道虎徹の鍛刀は、新刀中での横綱格で、近世刀工の第一人者である。

越前の生れであるが、郷里に居た時、福井藩士の某に頼まれて、一刀を鍛へ上げたが、まだ砥石にも掛けぬ處へ、その藩士がやつて来て虎徹に向ひ、

「どうも、あまり感心した出来ではないな、武士の用には立ちさうもあるまい。」と云つた。それを聞くと、虎徹はサツと顔色を變へて立上つた。

「役に立つ立たぬは、試めて見ねば解らぬ、……それ、この通りぢや……」言葉の下から、その刀で、いきなり藩士を斬殺してしまつた。そして、その儘郷里を逐電して江戸へやつて来た。

初めは下谷の池の端に住み、後湯島へ移つたが、まだ名人たる事は世に知られなかつた。その後水戸義公(光圀)に知られ、その差料の刀を鍛へてから、漸く其の名を認められるに

至つた。性格は豪邁で、物事に頓着しない、名人氣質であつた。

ある夜、自分の鍛へた刀を差して、筋違見附を通つた。折から澄み渡つた中空に、銀の如く月は輝りはえて、そゞろに心のをどり立つやうに覺えた。虎徹は思はず腰の一刀を抜くと、「ヤツ」と叫んで、橋の擬寶珠を切つた、すると、唐金の擬寶珠が三寸ばかりも切れた、それが何時となく世間に知れて、大評判になり、虎徹の名は一層江戸に傳へられた。

榊原鍵吉——劔道——

萬延元年、幕府が内外多端に備へるため、急に軍制にも改革を企て、まづ講武所なるものが創設された、その折第一に推されて師範役となつたのが鍵吉であつた。當時江戸の三劔士と云はれた、お玉ヶ池の千葉周作、九段の齋藤彌九郎、蛤蜊河岸の桃井春藏などと云

ふ名人よりは、少し後に出た人であるが、幕末の舞臺に活躍した劍豪であつた。後年は下谷車坂に町道場を開いて、一世にその名を謳はれた。

幕臣として、彼の長州征伐に向つての歸途である。彼が京都伏見の里の或る掛茶屋に休んでゐると、三人連れの土州藩の若侍が、酒の酔に乗じて、鍵吉に喧嘩を仕掛け、口々に悪口雑言した上、果ては刀まで抜いて詰め寄つた。——初めのうちは、鍵吉も血氣にはやる酔どれの侍と思つて、打捨て置いたのであるが、抜刀までして詰め寄つて來られるのは、もう黙つても居られなかつた。彼の面上にも一抹の殺氣が漲つて來た。——黙つてゐるのを好い事にして、若侍たちは、刀を抜きつれると、鍵吉の前に進んで來て、

「打ち斬るぞ。」

と叫んだ。でも彼は尙ほ平然として、刀の柄にさへ手もかけず、グツと上眼で三人を睨んでゐたが、

「何をツ。」

と一聲、鍵吉が叫んだと思つた刹那、紫電一閃サツとひらめいたが、三人の藩士はもう鮮血を浴びて、その場に倒れてゐた。——電光石火の早業と云ふのは此の事であらうか、然も斬つた當人の鍵吉は、なほ依然として靜に床几に腰をおろしたまゝであつたと云ふ。その腕の牙え驚嘆に價ひするものがあつたと傳へられる。

上野の戰爭當時、事情があつて正式には彰義隊へ加はらなかつたが、いざ戦ひとなると、彼は密に車坂の道場を抜け出し、彰義隊にまざつて、山下あたりで長州の同勢をさんざんに斬りまくつた。愈よ敗戦となると、彼は百姓姿に身を扮し、一品親王輪王寺宮の御警固をして、谷中から三の輪の安全な地までお送り申上げ、やがて道場へ戻つて、何喰はぬ顔で寝てゐたと云ふ。その豪膽さには、門弟の方がハラ／＼させられたさうである。

久米平内 — 劔道 —

据物斬り、居合拔きの名人であると共に、平内は捕手、人斬りの名人であつたのである。——今でも淺草の觀音様の境内には久米平内の石像がある、參詣の男女も常に絶えない。そして不思議な事に今では花柳界の人たちが、待人などを祈願すると御利益があると云はれる。

平内は、人を斬る事、搦捕る事の名人であつたので、一浪人の身でありながら、幕府のお役人に召出されたのである。

盜賊改め役青山主膳の時、彼はその配下の用人格に擧げられた。その結果、主膳の役係の時代には、江戸の悪者が根絶しになつたと云はれる、それは平内の秀れた腕によるのであつた。その以前は、死罪打首のものは、非人が手を下す役であつたが、主膳の時から、平内が斬る事になつた。彼の斬つた首は二千餘に上り、首塚を二度も建て、供養したと云はれてゐる。

天和三年に平内は死んだが、彼は最後に臨んで、

『私が死んだら、私の像を造つて人の澤山集る處へ建て、くれ、生前に澤山の人を殺した罪業を消滅するため晒し者にならう。』

と云つた。

彼は、三尺五寸の大業物を、坐つてゐた儘で抜いたと云ふ、居合拔きの手練は、古今を通じて及ぶ者が無いと云はれる。

長崎の龜女——金彫——

龜女は女に似氣なく、父の業を繼いで、香爐作りとして、當時稀代の名人と云はれた、長崎の人である。

然し、女でありながら男まさりの名人と云はれるだけあつて、不羈豪快、何時も酒に親しんで、男を相手に快飲するのを好んだ、その上、名人氣質で、氣に向かないと何んな高貴な人から頼まれた仕事でも、手をつけようとしなかつた。そのため何時も清貧洗ふが如きもので、借金取りは毎日のやうに來ると云ふ有様だが、龜女は一向平氣なもので、蚊が啼く位にしか思はない風であつた。

時折、仕事を仕上げて、纏つた數十金の金が入ると、早速飲み仲間を集めて、徹宵痛飲してしまつた。

或る時、長崎奉行が、龜女に香爐の製作を頼んだ、然し半年たつても出來上らない。然し奉行も彼女の氣質を知つてゐるから、別に督促がましい事は遠慮してゐたが、その中行が交代される事になつて、江戸へ歸らねばならなくなつたので、その趣きを龜女に通じて、その製作を急がせたので、龜女も漸く仕事にかゝつて、やがて出來上つたが、なかなか届けようとならない。そして或る日、その香爐を臺の上に乗せて、暫くじつと眺めながら、プカリ／＼と煙管に煙草をつめて喫んでゐたが、フと其の眼が急に鋭く輝いた。そして、いきなり立上つて仕事場から大斧を提げて來たが、

『ヤツ。』

と云ふ聲と共に、その香爐を叩き壊してしまつた。——何處か氣にいらぬ點が見出されたためであつたらう。

それと聞いた奉行は、餘儀なく、龜女の尊い藝術心に、敬意を表さねばならなかつた。

高村光雲——木彫——

光雲の壯年時代の明治十四五年頃は、木刻で生活を立て、行く事は出来ない状態であつた。それで食ふ爲めの餘儀なさから、鑄物の仕事をして生計を立てゝゐた。

或る晩、仕事先から可なりの給料を貰つて歸つて来て、ふと自分の道具箱を開けて見ると、その中に入れてある木刻用の小刀が、皆な眞赤に錆てゐた。それを眺めた光雲は、今更に胸の迫るやうに覺えた。

「あゝ、とんだ事をしてしまった。折角師匠の東雲先生から譲られた、大切な遺品の小刀をこんな眞赤にしてしまった、これも只だ金が澤山とれると云ふ事から、木刻を止めてしまつたからだ……」

さう思ふと、熱い涙が眼に浮いて、師匠東雲に對して、限らない慚愧が沸いた。

「たとへ食べられなくつても、……師匠が授けてくれた木刻を止めては申譯ない、死ぬまでもやらう。」

さう呟いた彼は、何ともつかぬ感激に、強い力が全身に漲るやうに感じた。その夜直ちに彼は、錆のついた木刻用の小刀を一心に磨き初めた。——かくて彼は、木彫界の巨となつたのである。

觀世新九郎——鼓——

能役者新九郎は、當時の將軍から紫調を賜つた程の鼓の名人であつたが、まだ權九郎と呼ばれてゐた若い頃は、幾ら一心に稽古をしても、なか／＼鼓が上達しなかつた。

或る朝の事、鼓の稽古を一先づ終へて、部屋で休んでゐると、茶の給仕に出て来た老婢が、權九郎に向つて、

『あなた様の鼓も、近頃大分御上達なさいましたね。』

と云つて褒めたので、權九郎は笑つて、

『お前にも、鼓の音が聞き分けられるのか、どうして私が上手になつたと云ふのだ。』

と不思議さうに尋ねると、老婢は、

『わたくしには、舞の事などは解りませんが、鼓の音は、習ひませんでも好く解ります。

それと申すも、大旦那様が鼓をお打ちになるのを、永い年月耳にしてをりましたからで

ございますが、大旦那様がお打ちになりますと、一打ち毎に、毎朝たぎつてをります此

の茶釜に響きました。若旦那様がお打ちになつても、これまで少しも響きませんでした

が、この四五日前から、時々響くやうになりました、今朝ほどなどは、大旦那様の時と

同じやうな響きが傳はりましたのです、それで大變御上達なされた事と存じた次第でこ

ございます。』

彼は、この老婢の言葉から、初めて自分の鼓の音が、父のそれに近づきつゝある事を知ると共に、層一層の努力を以つて、藝道に精進するやうになつた。

森田宗禪 — 笛 —

森田庄兵衛宗禪は、笛を取つては一代の名手であつたと共に、それだけ高い見識を持つてゐた。

或る時尾張侯に招かれて、能の笛を吹く事になつた。愈よ萬端の支度が整ひ、侯も出座して待つたが、何時まで経つても、肝心な宗禪が出て来ない。性來短氣な尾張の殿様は、少なからず立腹の態で、イラ／＼してゐる様子が近侍の者にも解るので、係の者の心痛は

一方でない。が、宗禪の姿は何處へ行つたか皆目見えないのである。大騒ぎをして捜し廻つたが解らない。蒼くなつてゐる處へ、何處からともなく宗禪は、落付き拂つて控への部屋へ歸つて來た。係の者も中腹で、言葉も荒く、

『何處へ行つてゐられたのだ、もう殿は先刻から御出座になり、お待ち兼ねで御氣嫌が宜しくない、早くお願ひしたい。』

と、急ぎ立てると、宗禪はなか／＼席を立たうともせず、靜に煙管へ煙草をつめて、プカリ／＼やりながら、

『さうお急きなさるな。殿がどんなにお怒りになつて、此の身がどうならうと、私が笛を吹かうと云ふ氣分になるまでは、なか／＼舞臺へは出られ申さぬ。笛は私の生命ぢや、氣に向かぬでは、思ふやうに吹かれはせぬ。たつて、今直ぐとなら、私はこれで歸る。』彼は動かうともしなかつた。——然し、暫くして、舞臺に出たが、その妙音は、あらゆるものゝ心を捉へ、神秘の藝術境へ遊ばせ、並居る者を感じせしめたと云ふ。

山勢松韻——琴——

山田流の琴曲が、今日の盛を來してゐるのは、實に名人松韻の力に待つ事が多い。盲人ではあるが、上野に音楽學校の創立されると共に、選ばれて最初の教授に任命された。

彼は生れながらの盲目ではあつたが、日常動作の上に殆ど人手を借りなかつた。感の好い事は、眼明きの人に變りがない程であつた。

松韻自身も、それが自慢であつたに違ひない、よく門弟たちを相手に、家の中で鬼ごつこや隠れん坊をして遊んだりしたが、彼が鬼になると、どんな處に隠れてゐても、直ぐに探し出されるし、それが誰であるかも直ぐ當てられてしまつた。眼隠しの手拭を巻いて置いても何の役には立たないのである。それで門弟どもも、いささか口惜しくなつて、惡戯

半分に、彼が通る座敷の彼方此方に、煙草盆や火鉢などを散らけて置いて、彼は決して夫れにつまづいたりするやうな事はなかつた。必ずそれを避けて走る、その敏感は眼明き以上である。

松韻は、伊達侯に愛されてゐた、よく招かれて邸へ行つた。或る日、松韻が座敷へ入つて來ると、侯はゴロリと横に寝そべつて、挨拶を受け、やがて、

『山勢……私が今どうしてゐるか解るか。』

と尋ねた。彼は言下に、

『横に寝てゐらつしやいます。』

と云つたので、侯は飛び起きて、

『濟まぬ事をした、決してお前を盲人と思つて禮を缺いたのではないが、どんなにお前が感が好いか、一寸知りたかつたのだ、どうか許してくれ。』

さう云つて、深く詫びられたと云ふ。

豊竹麓太夫 — 淨瑠璃 —

享和年間、その美聲を以つて、一代の名人と稱された麓太夫と云ふ淨瑠璃語りがあつた。彼は新しい語物を作者から書き下ろして貰ふと、必ず第一に自分の女房に語つて聞かせた。そして女房の聞いてゐる様子が、深い感動を受けたやうであると、彼は安心して夫れを公開の席で語る事にしてゐた。

或る時、名作者河四郎の作「太閤記」が書き下ろされた時にも、先づ女房を前にして語つて聞かせた、然し一向感動する様子が無い、そこで更に河四郎に修正して貰ひ、語り方も變へて演つて見たが、まだ女房は何んの感動を受けた様子が無い、其處で更に改作して貰ひ、自分の語り口も一層研究して、語つて聞かせると、今度は女房が泣き出したので、

初めて之れを上演した處、果して非常な當りを得て、彼の名は一層に高まつた。

或る人が、一々女房に語つて聞かせる譯を尋ねると、

「世の中に女子供ほど、物に感動し易いものはありません、その女にさへ感動を與へられないやうなものは、決して世間の方から好評を得る筈がありません。」

彼は、新作、改作の度に、必ず女房に語つて聞かせるのを一生止めなかつた。

攝津大掾——淨瑠璃——

越路太夫と云つたが、北白川宮から攝津大掾の名を賜つた名人である。語り口も勿論であるが、秀れた美しい聲で一世を風靡した。且つ藝人には珍らしい、上品な風格の持主であつた。

自宅から、文樂座まではさう遠いと云ふ程ではないが、かうした地位の藝人としては、誰もが俥で行くのが普通である。それなのに大掾は必ず歩いて通ふ、靜に足を運んでゆつたりと歩いて行く、年をとつてからも止めなかつた。

「太夫、もうお年を召してゐるのですから、俥にお乗りになつたら。」と勵めるものがあると、

「私が歩くのは、自分の藝のためなんです。私は決して急がない、牛のやうに、ゆつたりと歩いて行く、氣を充分に落ちつけて靜に歩きます、さうすると、向うへ行つてからちつとも息に故障が起らない。俥に乗ると、どうしても動搖が激しいから、何處か動氣に變りが起る、さうすると語り口に疵が出る、淨瑠璃には俥は悪いと思つて乗らないのです、殊に年とつたら、餘計にさうです。」

と云つた。彼は、かうした些細な事にも、注意を怠らない人であつた。

初都々逸仙歌——小歌——

小唄の名人、初代仙歌は、當時また滑稽と頓智の名人として、江戸に其の名を謳れた者である。

或る時、秋田藩主の佐竹侯が、この仙歌を招かれて、何か彼奴を一つ困らせてやらうと、色々苦心された上、まづ控への座敷に彼を通した儘、五六時間も其の儘に打ち捨て、置いた。やがて佐竹侯は座を立つて、「彼奴どんなに困つてゐるだらう」とほくそ笑みながら、そつと仙歌のゐる座敷の襖の隙から覗いて見ると、案の如く彼は退窟しきつて、丁度大きな欠伸をしてゐる處であつた。佐竹侯はいきなり襖を開けて、
「坊主、そのあくびとかけて……」

と問うた、すると仙歌言下に、

「お殿様の御國産。」

と答へたので、

「その心は……」

と侯が重ねて問ふと、

「あきた（秋田）から……でございます。」

これには、侯もこの句がつけなかつた。

正流齋南窓——講談師——

本名は芝山次郎常晴、講談師として當時名人の稱を受けてゐた。今から四代位前の人

であらう。此の人博覽強記、當時の文人雅客の間に交りが深く、一代の見識を持つてゐた。然も大天狗で、いつも高座の上で、

「凡そ日本國中に南窓の知らね事は嘗てなく。」
と威張つてゐた。

すると或る日の事、その近所に旅人の行倒があつた。只だ菅笠に何々村と書いてあるだけで、何處の國の人とも解らない。其處で近所の者が「日頃の天狗を試してやらうぢやないか」と、面白半分南窓の家へ使ひをやり、呼んで来て、その村が何處の國にあるかを尋ねた。——南窓咳一咳して、

「……抑も此の何々村とは、上總の國天羽郡の中にして、當時下谷何々町に住まはれる、御高何千何百石、御役は何の何をなされる、某殿の知行所で……」

と、淀みも無く述べたてたのが、如何にも尤もらしく聞えたので、早速人をやつて問ひ合せると、少しも間違ひがなかつた。人々も今更ながら南窓の博識には感じ入つたと云ふ。

尤も後で聞くと、南窓は元房州上總の生れで、偶然その村の附近はよく知つてゐた爲めだと云ふが、とにかく記憶に優れた人であつたに違ひない。

桃川如燕 — 講談師 —

先代如燕は近代の名人であつた。頭は大坊主で、肥つた身體を高座に置いて、デロリと見渡した處は、英氣ほどばしる慨があつて、少々恐ろしい程であつたと云ふ。

得意の「黒田騒動」でも演らうものなら、油が乗つて來ると、全く無念無想の境に入つてしまふ。藝に熱があるから人も魅惑される。その代り、そんな時お客でも立たうものなら大變な事になる。自分でも、

「私が、一心に演つてゐる最中に、もし席でも立つ奴があつたら、その客の頭に喰ひつ

いてやるつもりで演つてゐる。』

と云つてゐた程である。

或る晝席で、彼が一心に述べたてゝゐる時、高座の直ぐ前にゐた一人の客が、眠くでもあつたか、思はず大きな欠伸をしたものだ。夢中で演つてゐた彼の眼に、それが止まつたから堪らない、

『馬鹿ッ』

と、一聲怒號を發すると共に、見臺越しに、猿臂を延しさま、張扇でその客の頭をピンリと喰はした。

然し、客も怒らなかつたし、彼も語るのを止めずに、その儘先をつゞけた。緊張した客席に何のさわめきも起らなかつたと云ふ。

三遊亭圓朝——人情噺——

幕末から明治へかけて、江戸から東京の人氣を一人で脊負つてゐた圓朝は、人情噺に於いては古今を通じて天下の名人と折紙をつけられてゐた人である。

この圓朝が、或る日の事、晝家であり同時に時晝の天才と云はれた柴田是真の許を訊ねた。すると是真は色々世間話の末、語るともなく、神田佐久間町の炭薪商鹽原屋二代にわたつての興味ある物語りをした。それは即ち上州沼田から鹽原多助が江戸へ出て、辛苦の末屈指の豪商となつたが、不思議な因縁話から、其の家も二代目で亡び、一門残らず死に絶えたと云ふ實説であつた。——是真の住居は鹽原屋の近くであつたので、委しい事情を知つてゐたのである。

この話を、一心に耳を済まして聞いてゐた圓朝は、是眞の話が終ると、物も云はず氣色ばんで立上つた。驚いたのは是眞で、

『どうしたい圓朝さん……まだ用事の話が済まないぢやないか。』

と云つたが、圓朝はもう其の時、玄關まで駆け出して行つてゐた。返事をするのもどかしさうに、せかくした調子で、

『私は、これから一寸上州へ行つて來ます。』

さう云ひ捨てたまふ、格子戸も閉めずに飛び出してしまつた。——彼は其の足で、直ぐ上州への旅に赴いた。彼はもう、この興味深い人情噺の材料に、心もわく／＼としてゐたらしい。

そして上州で委しい鹽原多助の經歷を調べ、かの有名な圓朝得意の人情噺「鹽原多助」を作り上げたのであつた。

世四 春風亭柳枝——落語——

先代の柳枝は、子供の時から落語が好きで、遂に十二歳の時、三代目柳枝の弟子として貰ふ事になつたが、愈よ弟子入りの當日、三代目が、

『お前さんは飯が好きかい、もし飯が好きだつたら此の道には入れないぜ……名人にならうと思ふなら、十年位は飯を食はないつもりでゐなくつちやいけねえ。』

と云ふと、柳枝は平氣な顔つきで、

『えゝもう、十年はおろか、一生飯なんか食はなかつたつて宜うございます。』

それで、三代目の弟子になつた。そしてこの意氣が、彼を名人と云はれるまでにさせたのである。

柳家小さん — 落語 —

明治大正昭和を通じて、落語では群を抜いた名人である。

その小さんは、あの政界の怪物小泉策太郎さんに似た、にがいやうな生真面目な、落着き拂つた高座の顔姿に似合はず、大變なそゝつかしやである。自分の外套を着た上に、更に他の外套を着て歸つたり、帽子を冠つた上へ、また一つ帽子を冠つて出かけたり、何時も珍無類の行動を、落ちついた態度で平氣でやつてゐる。

或る日、彼は獨りで銭湯へ行つた。そして着物を抜いで、手拭をぶらさげ、元氣よくドボンと湯槽につかり、ひどく好い氣持になつてゐると、湯槽に入つてゐる人が、

『もし〜、貴方……帽子を……』

と云はれたので、ハツと思つて頭へ手をやると、ちやんと帽子を冠つた儘でゐた。「これはお呪ひで……」とも云へず、極りの悪い事夥しい。

『へへッ、どうも御親切に……』

と云つた儘、飛び出して歸つてしまつた。

名馬に纏る逸話

井上鹿毛

天正十年六月、明智光秀が、秀吉の爲めに山崎の戦ひに敗れ、遂に戦死した際、同苗明智左馬之助は安土城から取つて返し、居城たる坂本の城に入らうとしたが、敵勢に追ひ迫られ、琵琶湖を馬で乗切つて一直線に城へ入つたと云ふ話は、史上でも有名な逸話として傳へ残されてゐるが、その「湖水渡り」に乗つた名馬が、即ち此の井上鹿毛である。この馬は信濃立の黒鹿毛で、長けは二寸五分（四尺）であつたと云ふ。この名の他に「大鹿毛

又は「いたや鹿毛」とも云はれ、古今の名馬と稱されてゐる。

「川角太閤記」に「彌次次（左馬之助秀俊）思ふ様、此馬逸物なりと雖も、安土山より乗出したる馬なれば、早や疲れなん、肝よき馬は乗殺す迄で、くたびれたる氣色見えぬものなれば、是より急に乘らば一度は屏風返しに、ひつたとや倒るべきなれば、敵三町ほど近付いて鞍坪へなほるべきと定め、息合ひを取出し、ゆる／＼とかひ、馬の息をつかひ、敵三町ほどに見えしかば、又打乗り、淵澤を嫌はず一文字に坂本城へ乗り入り、城にありける仲間など二三人呼びよせ、此馬さだめて敵へ渡る可きなり、此馬の恩情後世までも忘れまじきなり……云々」と記され、又「常山紀談」にも、
 「馬に乗り坂本に入る時、十王堂の前にて馬より下り、手綱をも堂につなぎ、矢立の硯取出し、明智左馬之助湖水をわたせる馬なりと札に書いて、手づから髪に結び付け、坂本城に入り自害せり、馬は無双の駿足なり」と記されてゐる。

鬼鹿毛

信玄の父、武田信虎が秘藏の馬であつた。長け八寸五分、肝と云ひ形と云ひ、昔頼朝が秘藏した生月、摺墨にも劣るまいと云はれたほどで、近國にまで知られた評判の高い名馬であつた。

信玄が未だ勝千代と云つてゐた年少時代に、父に向つて此の鬼鹿毛を自分にくれるやう所望したが、信虎は惜しんでなかく與へず、

「お前が十四になつて、元服をする時、武田重代の郷義廣の太刀と一緒に遣はさう。」と云つて、所望する度に言葉を左右にし、なかく呉れさうもなかつたので、それが原因で親子の感情が齟齬し、遂には子として親を追ふやうな事實を招來したのだとさへ云は

れてゐる。それほど優れた名馬であつたと傳へられる。

吉川

松平甚太郎家忠の愛馬であつたのを、馬好きな織田信長が、たつて欲しいと望んだので餘儀なく家忠は信長に献上した。それで其の名を「吉川」とつけて秘藏してゐた。

然し、此の馬を信長が切望しただけあつて、世にも秀れた駿馬ではあつたが、信長の厩に來てからは、氣が荒だち、やたらに人を咬んで、どうしても飼ひ馴らす事が出來ないため、信長もほと／＼手を焼き、

「やはり元の主人が好いのだらう。」と云つて、甚太郎家忠の下へ送り返した。喜んだ家忠が、その愛馬の側に立つと、馬は

さも懐しい様子で、主人の前に前足を折り敷き、家忠に直ぐ乗れよと云ふ風情であつた。家忠も、その口に手をかけながら、思はず熱い涙を浮べたと云ふ。

須彌長

天正五年に、島津修理太夫義久より大友宗麟へ贈つた、槽毛の名馬で、その長け八寸餘、「須彌の髪、夜目節より五六寸ばかり下る故に此の名あり」と傳へられてゐる。

その疾い事、恰も飛鳥の如くで、乗つてゐるものが、胸の處へ扇を開いて當て、置くと、手を持ちそへなくとも落ちないと云ふほど、疾く馳つたものであつた。宗麟は殊に秘藏して、召料の第一としてゐたと云はれる。

百段

秀吉と家康が對峙した、史上有名な小牧合戦、かの長久手の戦ひに於いて、池田勝入と共に岡崎中入りの奇策を企て、失敗し、遂に戦場の露と消えた勇將森武藏守長可が秘藏した愛馬である。

長久手の戦場、家康の旗印を眼がけ、最後の戦を試みると、長可は百段に跨つて、猛然と突進した、この時横合ひから、例の赤備井伊直政の一隊が、釣瓶射ちに放つ鐵砲に、無念や長可は眉間を打割られて馬上にたまらず、どつと落ちた。と、愛馬百段は、主人の死に怒りを發したか、迅風の如く敵陣に躍り入り、縦横無盡に馳け廻り、敵を扼き、或は前足で掻き倒し、又跳ね倒すと云ふ有様に、敵も思はずたぢろいだ、その間に味方の從者

が馳せつけ、主人長可を肩にかけ、敵手に渡さず引き退く事が出来た。愛馬百段も、鎗創二ヶ所ほどを受けたが、命を完うして己が陣所に歸つて來たと「茗話記」に記されてゐる。

膝突栗毛

元龜三年五月四日、伊東義祐は一族伊東加賀守その他の將卒三千餘騎を率ゐて加久藤飯田の城を襲うた。この折、薩摩勢は人数が少く、進んで討つ事が出来なかつたが、島津義弘は非常に憤激し、自ら手兵三百を督して敵勢に向つた。

この時義弘の乗つてゐた馬は、長壽院盛淳の獻じた牝馬であつた。愈よ敵の伊東勢を破り、主將加賀守の首をあげ、敵軍の壊亂するのを更に追ひ討つて、鬼塚原と云ふ處まで來た時、敵將の一人、日州吉川の城主抽木崎丹後守と云ふのが突如馬を返して、義弘を弓

で射らうとした。義弘大いに怒つて、

「我を誰れと思ふ、島津兵庫頭ぞ。」

と叫んで突進したので、丹後守思はず其の威勢におそれて弓矢を捨て、馬から飛び降りて平伏した。その刹那、馬を躍らして突き進んだ義弘は、馬上から鎗を振つて突き差さうとしたが、少し間が距つてゐたので、鎗尖か丹後守へ達しなかつた、すると其の乗馬に、靈があつて主人の心持を察したのか、つと馬が前膝を折つたので、義弘の鎗は充分に丹後守を突き刺す事が出来た。

更に進んだ義弘は、又も敵將比由木玄齋を馬上から刺殺し、大勝を得て兵を返した。その後、他に逢ふ毎に、愛馬が前膝を折つて自分の鎗を助けた事を話し、その名も「膝突栗毛」と呼んで、鍾愛し常に軍旅の供にした。

小

紫

これも島津義弘の愛馬である。慶長五年九月關ヶ原合戦の際、騎乗してゐた馬で、福山野牧の産である。

戦に敗れ、九州差して歸陣の途次、この馬を住吉明神の神馬として献じたが、馬は主人義弘の後を慕ひ、神社の厩から荒れ出し、遙に海に乗り出して居た義弘の船を眼がけ、一散に海に飛び込んで三町あまりも泳いで來たが、とても追ひつく事が出來ないと思つたか、再び元の濱邊に引返し、渚に立つて幾度か高く悲しげに嘶いたが、やがて眞霧に社壇に駈け入り、強かに頭を柱に打ちつけ、血を吐いて斃れ死んだ。

帝釋栗毛

鬼將軍加藤清正の愛馬である。

清正も徳川が征夷大將軍の宣下を受け、天下を一統してからは、年々江戸に參勤して泰平をことほぎ、恰も馴れたる鬼の如しと云はれてゐた。屋敷は櫻田辨慶堀の前で、後に井伊家の上屋敷とされてゐた處である。(今の參謀本部)

彼は此の屋敷から、折々帝釋栗毛と呼んだ太く逞しい馬に打ち勝り、附近を徘徊してゐた事があつたが、鯨尺で四尺三寸ある着物が、膝下三里の少し下に掛つてゐたと傳へられてゐる。彼は何時にも備前兼光の太刀を帶し、供の者まで威風あたりを拂つて、諸人が恐れ尊んだと云ふ。その頃江戸の町人が、

江戸、衆にさはりはすとも

避て通しやれ帝釋粟毛

と、小唄につくつて謠ひはやしたと「文武叢誌」に記されてゐる。小唄にまで残る名馬として、清正の名と共に有名である。

富士の道芝

家康秘藏の駿馬であつた。

實利主義の家康は、名馬に對しても實際的を賞したものと見える。彼はこの愛馬の實力を試めさうため、ある時重荷を負はせて富士山に昇らせたのであるが、少しも疲れる様子が無かつたと云ふので、「富士の道芝」と名づけて秘藏したと云ふ事である。

然し、この馬は非常に感の強いもので、誰も好く馭する者がなかつた。それで以前金吾中納言秀秋の家臣であつた村上三左衛門吉正と云ふのが、練馬の名手であると云ふ處から、吉正を招いで乗らせて見た處、難なく乗り詰めたので、この馬を吉正に預けて飼養させ、後吉正は御家人になつたが、充分飼ひ馴した後家康の厩に返したと云ふ。

千 兩 黒

蒲生氏郷並に上杉景勝に仕へた名ある武士に岡左内と云ふのがあつた。至つて節儉に暮してゐたが、分限者と云はれ、金銀米穀の貯へも充分にあつた。然し徒らに一紙半錢をも費す事を吝んだので、世間から吝嗇家と嘲られてゐた。

すると或る時、馬子が一疋の黒い馬をひいて賣りに來た。それは非常な優れた駿馬で乗

心持も至つて好く、鞍の上の靜な事はまるで疊の上にあるやうであるし、迅い事は風のやうであつた。値段を聞くと、

「珍しい優れた馬だから、幾らと云ふ値段はつけられない程だ。」

と賣手の馬子は自贊してゐた。

この馬を見、且つ乗り試みた岡左内は、

「武士の寶は馬の他はない、敵を追ひかけたり、又は引退く時も、馬によらなければならぬ、命を全くして功名を擧げようためには、馬は寶である。」

さう云つたが、やがて、意を決すると、當時としては驚くべき、千兩と云ふ金を投げ出して其の黒馬を買つた。人々は一時啞然としたが、その噂はやがて遠國にまで知られた。

この馬は、後に將軍家の厩に立てられるやうになつたが、「岡の千兩黒」と云つて、當時評判の名馬と云はれてゐた。

布 引

丹羽五郎左衛門長秀の嫡子長重が、二本松の城主として在國の際、ある日城下を熊野道者が百姓馬に乗つて行くのを眺めて、

「さて、あの馬は駿足だ、誰かある、あの道者を呼び止めて、あの馬を乞ひ請けてまわれ。」

と近侍に命じたので、直ぐ後を追つて道者に仔細を申述べて頼んだので、道者も快くその馬を城主長重に與へて行つた。

やがて乗り試みて見ると、地路乗駟といひ、申分のない鎧下の名馬であつたので、道者が與へて行つた處から、その名を「道者」とつけて秘藏してゐたが、その後あまり優れた

名馬であると云ふ處から、江戸へひかせ、これを將軍秀忠に献じた。秀忠も乗試みた結果世にも稀な名馬であると云つて喜んで愛養した。この馬、駈を追ふに布一反を鞍の兩側に結びつけると、一文字に翻る處から、その名を更に「布引」改めさせ、大阪の役の折にも、秀忠はこの布引に乗つたと云ふ事である。

秀忠夢去の後、生前殊に秘藏の馬であつたと云ふ處から、増上寺にひかせ、境内の芝原に放し飼ひにして置いたと云はれる。

古 龍

蒲生下野守忠成の家臣に佐野太夫と云ふ侍があつたが、この太夫が買取つた馬に、黒毛で長け一寸ばかり、非常な駿足があつた、足に「かうがい」節がある處から、「音曲」と

名づけて秘藏してゐた。「ふし」があつて尙ほ好いと云ふ處から、この名がつけられたものであると云ふ。

この名馬「音曲」を、佐野太夫から將軍秀忠に献じたので、「古龍」と名を改めて愛養してゐた、然し此の馬は駈飛の足で、なか／＼乗手が無い處から、以前眞田七本槍の一人で、隠なき馬の名手と云はれた中村助六に預けて乗込ませた處、その早い事比類の無いものであつた。——後に井伊直孝に與へられ「章駄天」と名づけられた。

年 の 矢

津輕藩の馬役に木立長兵衛と云ふのがあつた、當時名を知られた馬術の名手であつた。ある日、その妻の兄に當る乳井義衛の宅を訪ねて、靜に碁を圍んでゐた。すると門前を

馬に薪をつけて通るものがあつたが、長兵衛基を打ちながら、フト其の馬の蹄の音を耳にして、

「あれは世にも勝れた馬だ。」

と呟くと共に、持つてゐた碁石を捨て、門前に走り出た。

長兵衛往來に出て見ると、果して駿馬であつたので、直ぐに御馬屋に牽せ、荷鞍を取つて馬場に引き出して見ると、彌よ優れた馬である、其處で早速殿に申立て、それを買い上げる事にし、一心に仕込んで行つた。

この馬は、赤石郡種里村から出た、當時四才の黒鹿毛の駒であつた。その後段々に乗立て、行くくと、五才の冬あたりから早足が出で、六才の頃には絹一疋を地上に落さず引いて馳るまでになり、名を「年の矢」とつけ、藩主の秘藏大方ならず、當時有名な名馬と稱された。

優婆塞

越前の藩主、先の中納言秀康の嫡子忠直逆叛と云ふ噂が聞えたので、隣國加賀の藩主前田利常も、それぞれ軍の準備を整へなければならなかつた、その際、藩主が物具を着けて乗るべき名馬を選ばねばならぬので、加賀の領國の中二千疋にあまる馬を集めて、富田越後が馬を選み出したが、漸く鹿毛で長け二寸五分の駿足を見出した。

其處で、大庭に旗數百本を立ち並べ、伏せつ立てつし、金鼓を鳴らし、鐵砲を打つても、その馬は少しも驚く様子がない、それで名を「優婆塞」とつけ、秘藏のものとされた。

尙ほ、今一疋の替へ馬を求めようとして、更に領内の馬を集めて選んだが、「優婆塞」に比すべきもの一疋も得られなかつたと云ふ。

巳下黒

奥州南部から出た稀代の駿馬で、長けは五寸もあり、逞しいものであつた。
 堀田加賀守正盛が殊に秘藏して、「巳下黒」と名づけたが、これは、晝夜十二辰の巳の刻
 は、午の上刻に當るので、馬の上であると云ふ意味から、斯くつけたものであると云ふ。
 その後、脇坂淡路守が頻りに懇望したので、正盛から贈つた。淡路守も亦之れを愛養し、
 この馬を見ると、命も延びる感じがすると云ふ處から、更に「延命黒」と名附けた。

追風

松平大隅守光久が二十一年間愛養した秘藏の名馬である。

或る年、江戸から國元へ歸る際、

「追風も、もう二十年から乗馬として來たから、今年は國元へ引連れずに置かうと思ふ。
 馬へも好く申し聞かして置け。」

と家臣に命じたので、厩係りの者から、馬にその趣きを告げ知らせ、懇に食を與へてや
 つた處、馬はその話が解つたのか、頭を垂れて食も攝らず、哀れな姿をしてゐるので、厩
 の者も只だ不思議に思ひながら案じ合つてゐた。

やがて其の事が、藩主光久の耳に入つたので、非常に感動し、自ら厩へ赴き、親しく馬

の頭を撫でながら、

「お前を國へ連れて行くまいと云つたのは、お前を勞つてこそ申したので、お前が行きたいとなら、何時でも連れて行つてやるのだ。」

と、云ひ聞かせると、その主人の言葉を聞き分けたのか、如何にも嬉し氣な様子で嘶き、常の如く食を攝るやうになつた。

光久は、その馬を國元へ連れ歸つたが、「かうした名馬の種を残したい」と云つて、領内の牧場に放つた處、幾程もなく若駒を多く生んだ。この牧場の附近には、とかく狼が出で若駒に害を與へようとしたが、名馬は常に子供を守り、狼を蹴殺し、元氣少しも以前と變りがなかつたと云ふ。

後 藤 號

北海の龍と呼ばれた伊達政宗が、年既に七十に達し、老病に惱む身となつた折、急に三代將軍家光から招きがあり、餘儀なく病を押して江戸に上らうとした。その折、わざ／＼愛馬後藤號を厩から牽出し、

「お前が三十年の永い間、私の軍旅に従つて、千軍百馬の間を馳駈し、私に忠義を盡してくれた事は眞實に嬉しく思ふ。私が今度の出府は、思ふに二度と歸れぬ旅であらうと思ふが、お前は靜に國に留つて、老を養ふが好い。」

恰も人に語るやうに云ひ聞かせると、馬は其の優しい主人の言葉が解つたと見え、兩眼からハラ／＼と涙を流し、頭を垂れて別れを惜しむ風情憐れ深かつたが、その翌日の朝、

馬は厩の後壁を喰ひ破り、兼て扱ひの悪かつた馬丁を咬殺し、更に本城に駆け上り、千仞の斷崖より自ら落ちて死んだ。

政宗は、その話を聞くと深く憐れに思ひ、厚く葬らしめて碑を立て、「後藤號の墓」と刻ませた。現在仙臺市片平町に其の碑が残つてゐると云ふ。

亘理

八代將軍吉宗秘藏の愛馬である。

厩にも澤山の馬がゐたが、吉宗は最も此の亘理を愛してゐたし、また亘理も吉宗を懐しんでゐたと見え、吉宗が自ら乗る時は、嬉しうに首を垂れて意の儘になつてゐるが、他の係の者でも乗らうとすると、跳ねをどり、荒れ廻つて近寄る事も出きない悍馬であつた。

吉宗は此の馬に乗つて、馬の頭を臺とし、鳥銃を好く討つたりしたが、少しも驚く風がなく、ビクとも動かないと云ふ、奇らしい駿馬であつた。

尙ほ吉宗自身の他には、馬の口を取つてひけるものは、元紀州藩以來吉宗の馬の口を取つてゐた、川村新六修常と云ふ侍だけであつたと云はれてゐる。當時人々が、

「あの亘馬は、よほど殿下の歡になつたものであらうか。」

と、不思議な名馬として噂しあつた。吉宗も亦馬術に對して、秀れた人であつたに違ひなす。

製復許不

昭和三年八月十五日發行
昭和三年八月廿五日發行

著者
檢印

珍談奇談逸話集

定價壹圓貳拾錢

著者	實業之日本社
發行者	東京市京橋區南紺屋町十二番地 增田義一
印刷者	東京市麹町區飯田町二丁目五十番地 猪木卓二
發行所	東京市京橋區南紺屋町十二番地 實業之日本社 振替東京三二六番 電話京橋五一二一番

東京印刷所印刷

無

憂

華

百七 定價 貳圓
十版 郵稅 十錢
絹裝 美本

九條武子夫人著

夫人や才色一代に秀れ、その才藻凝つて詩文となるや、世を擧げて渴仰やまさるものありき。

あゝ麗人逝いてまた歸らず、されど夫人が御靈は嚴として我等がうつし世に残されたり。何をか御靈と言ふや。逝ける夫人が全生涯を通じての隨感隨想を吐露せし「無憂華」一卷即ちこれなり。我等、今はたゞ夫人の心の鏡とも言ふべき、この「無憂華」によりて、在りし日の麗人の心を偲ばんとするのみ。

= 容 内 =

無憂華 (感想)	夕波 (和歌)	歌日記 (紀行)
幻の柱 (和歌)	ちぎれ雲 (感想)	囁き (和歌)
歸命 (感想)	蔓草 (和歌)	洛北の秋 (戯曲)

陸軍省新聞班長 櫻井肉彈大佐新著

隨物脚
筆語本

煙

幕

忽八版

定價 壹圓七拾錢
郵稅 十錢 四六版

肉彈とならび讀
まるべき名著い
よく出てたり

國寶的名著「肉彈」の著者が敢て確信を以て世に問ふ隨筆集即ちこれなり。著者の文名は滿天下これを知る。されば今日までの著書、何れも洛陽の紙價を高めざるはなく、本書亦世を擧げての歡迎を受けつゝあり、收むるところ長編四十餘、戀物語あり、人情哀話あり、人生記録あり、映畫脚本あり、旅順戦記あり、その文の圓熟老巧は、獨自の諧謔と相俟つて、文人としての肉彈大佐眞面目を遺憾なく發揮せり。

— (容 内) —

白樺の森	隣室の女	盜難品	幽霊の出る時
新時代十人斬	映畫撮影所の夜	古戦場の柳	桂花薄命
新聞手帖	兵隊芝居	彌助砲時代	追はれながら
R省記者俱樂部	李サン	同伴者	ダンフオール
ある女學校	李・女・馬	復讐	私と私に近い周圍
先陣争ひ	トテもシャンなる彼女	五人ながら	奇縁
まぼろしの殺人	修繕の利く間	傘	三人の先生
秩父の山うるはし	錦繪「調練」	ひとみ	さすらいの子
ある湖畔の宿	揺れ、崩れ、焼け	二つのこと	寫の松太郎
	歸省して	青いピロイドの服	器械體操

奎城増田義一著 廣川松五郎畫伯裝幀

現代名士奇聞錄 茶前茶後 忽六版 定價壹圓 郵稅四錢

此人にして此著あり！正は是れ日本一の名士片影録！

本書は主として現代名士の性行につき興味ある逸話を集録したるもの、收むるところ政治家あり、實業家あり、教育家あり、醫師あり、文士あり、軍人あり、藝術家あり、その美談、珍談、皮肉、滑稽を遠慮なく素破ぬけるものにして、一讀無限の興味を覚え、巻を掩ふの暇なからしむ。苟くも寸暇だにあらばこれを繙き、天成のユーモアに接すると共に天下の名士を測面より観るの料とすべし。

（部一の容内）

服部時計王一生一代の失敗 巖谷小波氏の桁違ひの失策 埴原公使「君が代」を忘る 芳賀矢一博士の主賓抜き送別會 一高生を泣かした新渡戸博士の熱誠 大倉喜八郎翁鰻攻めにあふ 加藤高明伯の皮肉 川上操六將軍、橋本雅邦畫伯の人格に服す 長岡外史將軍は變相術の名人 中村進平博士、外國にて邦人の珍發明に驚く 戰勝を神に祈る兒玉大將 安部磯雄氏胸像に泣く 「九條さん」と「お嬢さん」の聞き違ひ 坪内逍遙博士の狂歌 武子夫人の歌、良致男を動かす 黒岩涙紅氏は五目併べの恩人 人違ひ珍談 同姓の間違ひ 居睡りに巧拙あり 珍雅號の由來 三木武吉氏の隣へ三木武吉 三宅雪嶺氏訥辯の雄辯 橋本雅邦畫伯の涙の出る惡戰苦闘 其他數百項

著一義田増 長社本日の業實

青年出世訓

版一十 定價貳圓 郵稅拾貳錢 四六判上製函入

本書は、向上に燃ゆる青年の進路を、正しく指導するために、抽象的の理論に偏せず、實例に徴して現實化し、加ふるに興味饒多ならしむるに努めて、修養出世訓を述べたるものなるを以て、一般青年の讀みて裨益せらるゝ所絶大である。輕薄なる惡趣味に誤まれ居る青年の多く見出さるゝ今日、この出版あるは誠に時機を得たる快舉と言はねばならぬ。

（目略容内） 人格第一主義……………青年と時俗超越……………注意すべき首の振り方…………… 青年と感激……………一身上の方向轉換……………學生と思想問題…………… 眞劍味の偉力……………人を引付ける力……………求職者に必要な準備…………… 青年煩悶の豫防……………反抗心の善用と悪用……………其他三十餘篇……………

立身の基礎	三十版	定價貳圓貳拾錢	郵稅十二錢四六判
青年と修養	七十八版	定價壹圓三五拾錢	郵稅六錢三六拾錢
思想善導の基準	二十一版	定價八錢四五拾錢	郵稅八錢四六拾錢
大國民の根柢	十五版	定價壹圓四六拾錢	郵稅十錢四六拾錢

婦人と修養

忽ち 定價壹圓五拾錢
再版 郵稅拾錢 四六判

實業社 日長 著 田義一 著

新時代の婦人にはまた新時代の修養書が必要である。空漠たる文字を聯ね古き傳統の殻を出でざる所謂「女大學」式修養書は世に乏しくない。されど眞に婦人一生の幸福を希ひ潑刺たる近代生活を背景として、時代に適應せる修養と説くものに至つては未だ之を見ないのであります。

本書は、廣く現代の女男兩性の長所缺點を熟知せる著者が、婦人の同情者たり、慰安者たり、鼓舞者たり、解決者たらんとして稿を起せるもの、その説く所保守に墮せず、過激に流れず、空理空論を避け、あくまで具體的に説明し、一讀その日より、取つてもつて心の糧として役立つものは、實に本書であります。

—(目略容内)—

- 處女の誇りを傷つくる
- なかれ……
- 新郎を撰擇する標準
- 嫁ぐ者の心の準備
- 縁遠き婦人の覺悟
- 輝きある結婚生活の仕方
- 明るい氣分の持ち方
- 婦人の心機轉換法
- 戀愛に悩める若き婦人へ……
- 若き婦人は何故に誘惑
- に罹り易いか……
- 男子に對する婦人の態度
- 婦人の心理に對する理解
- 婦人の自尊心を高めよ……
- 我子の對する理解……
- 情操教育を閉却する家庭……
- 娘の結婚に對する親の無理解……
- 夫を愛し得ざる婦人……
- 夫婦の不和解決法……
- 良妻主義より賢妻主義へ……
- 賢母主義より慈母主義へ……
- 父子不和の板ばさみ……
- 子を捨てて夫を捨てる婦人……

旅行禮讚	八版	谷口梨花氏著	定價貳拾貳圓
竹柏漫筆	再版	佐佐木信綱氏著 同 佐木雪子氏著	定價貳圓五拾錢
旅と歌と	三版	文學博士 佐佐木信綱氏著	定價壹圓八拾錢
和歌に志す婦人の爲に	三版	文學博士 佐佐木信綱氏著	定價貳拾錢
俳句の作り方と味ひ方	三版	荻原井泉水氏著	定價壹圓五拾錢
人相の神秘	三版	白西久遠氏著	定價壹圓五拾錢
手相の神秘	八版	永島眞雄氏著	定價壹圓五拾錢
生れ月の神秘	三十版	山田耕作氏著	定價壹圓五拾錢

<p>神經衰弱及強迫觀念<small>の根治法</small></p> <p>七版</p> <p>醫學博士 森田正馬氏著</p> <p>定價 稅 拾貳圓</p>	<p>神經衰弱痴呆症と梅毒</p> <p>再版</p> <p>醫學博士 赤津誠内氏著</p> <p>定價 稅 圓五拾錢</p>	<p>呼吸器病と運動療法</p> <p>再版</p> <p>醫學博士 小田部莊三郎氏著</p> <p>定價 稅 圓五拾錢</p>	<p>深呼吸と心身の改造</p> <p>七版</p> <p>醫學博士 小田部莊三郎氏著</p> <p>定價 稅 圓參拾錢</p>	<p>諸病營養療法</p> <p>再版</p> <p>伊藤尙賢氏著</p> <p>定價 稅 圓五拾錢</p>	<p>家庭看護の心得</p> <p>再版</p> <p>平井醫學博士 長岐醫學博士 共著</p> <p>定價 稅 圓八拾錢</p>	<p>腦の衛生</p> <p>八三版十</p> <p>醫學博士 櫻田十次郎氏著</p> <p>定價 稅 圓九拾錢</p>	<p>胃腸の新しい衛生</p> <p>八版</p> <p>醫學博士 杉本東造氏著</p> <p>定價 稅 圓五拾錢</p>
--	---	--	--	--	---	--	---

5

578
181

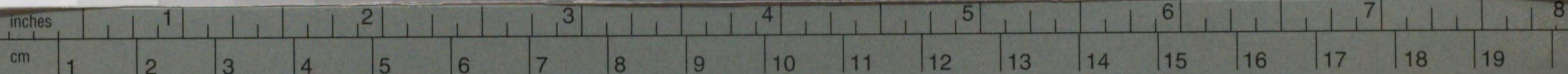


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

